

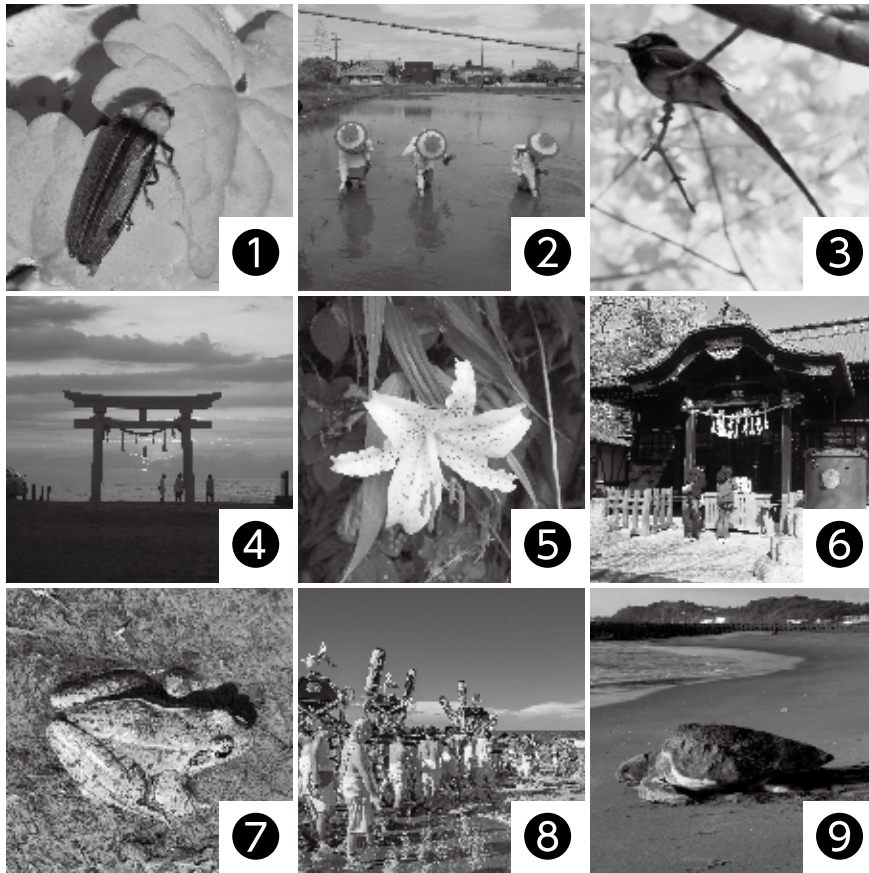
一宮町生物文化多様性計画

緑と海と文化をひらく いちのみや



令和7年3月
千葉県一宮町

表紙写真



1. ゲンジボタル(吉田正人氏)、2. 御田植祭(吉田正人氏)、3. サンコウチョウ(君島憲治氏)
4. 釣ヶ崎海岸(吉田正人氏)、5. 町の花ヤマユリ(吉田正人氏)、6. 玉前神社(吉田正人氏)
7. ヤマアカガエル(吉田正人氏)、8. 上総十二社祭り(一宮町観光協会)、
9. アカウミガメ(一宮町ウミガメを見守る会 中村裕隆氏)

ごあいさつ

このたび、一宮町で「生物文化多様性計画」を策定するにあたり、町長として一言ご挨拶を申し上げます。

一宮町は、現在サーフィンの聖地ということでも有名ですが、それ以外にも、小さいわりに、自然が豊かな町だという注目すべき特徴があります。町の東側には太平洋が広がり、西半分には起伏に富んだ里山と谷津田があり、北には一宮川が流れ、東側平坦地には広大な農地が展開していて、たいへん豊かな地理的表情を示しています。そして、一つの町の中に、山あいの溜め池の源流から、里山を小川で通り、一宮川本流に出て、海に入る、自己完結した水系も存在しています。そこに営まれる生物の営みは、各地区の地理的条件を背景に、豊かな多様性を示しています。また同時に、その自然の豊かさ、特に生物の多様な豊かさを背景に、一宮町では、古代からさまざまな人間の営みがこれも多様に展開してきました。これが歴史的に重なり、現在にも様々な生活文化として受け継がれてきています。

このたびの計画は、一宮町の、この自然環境とその生物多様性、さらには文化の多様性の貴とさをわたくしどもが改めて自覚しなおし、その保護と増進をはかることを通じて、わたくしどもの町の自然的・人文的な豊かさを、将来へ向けて劣化させずに受け継いでゆくことを目的とするものです。

今回の計画策定で主導的役割を果たしてくださった、生物多様性関連についての日本の第一人者でいらっしゃる吉田正人筑波大学名誉教授に伺ったところでは、千葉県下では、町村でいわゆる生物多様性に関連する計画などを有するところはまだないそうです。一宮町が、比較的小さいサイズの町でありながら、自らの町の生物多様性に関する計画を策定できることは、町長としてたいへん嬉しく存じます。また、生物多様性に文化の多様性も加えることは、これも吉田先生によれば、この問題圏における最新のトレンドに棹差すものといえるそうです。自然・生物と人間の、不断の相互交渉の上にわたくしどもの父祖の暮らしが成り立っていたのであれば、生物のみならず、文化との関連を視野に入れた計画とすることは、きわめて適切な選択であるといえます。

この計画が、これから長きにわたって、一宮町にお住いのみなさまに大切にされ、不断にバージョンアップされながら、一宮町の魅力を維持増進することに大いに役立つものとなることを心から期待申し上げて、わたくしのご挨拶といたします。

令和7年2月26日
一宮町長 馬淵昌也

目次

第1章	計画の目的、範囲、期間等	1
第2章	生物多様性、生物文化多様性とは？	2
第3章	一宮町の生物文化多様性	9
第4章	一宮町生物文化多様性計画	16
資料1.	一宮町生物リスト	22
資料2.	一宮町文化財リスト	34
資料3.	生物多様性に関するアンケート	36
資料4.	一宮町生物文化多様性計画策定委員会設置要綱	49
資料5.	一宮町生物文化多様性計画策定委員会委員名簿	50

第1章 計画の目的、範囲、期間等

本計画は、一宮町まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成27年策定、令和4年改訂）の下位計画として、一宮町の自然および文化に関する計画を定め、その保全と活用を図ることを目的とします。

本計画は、生物多様性基本法¹に基づいて策定される生物多様性地域戦略であり、国の生物多様性国家戦略（2023-2030）、千葉県の生物多様性ちば県戦略（平成20年策定）、千葉県文化財保護条例や文化財保存活用大綱とも整合性のとれたものとしします。

本計画の対象範囲は、一宮町の町内としますが、河川、沿岸などを通じて広域の保全が求められる案件については、近隣の市町村との連携を図るものとしします。

本計画の期間は、令和7（2025）年4月から令和13（2031）年3月とし、必要に応じて計画を改訂するものとしします。

¹ 生物多様性基本法

第十三条 都道府県及び市町村は、生物多様性国家戦略を基本として、単独で又は共同して、当該都道府県又は市町村の区域内における生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関する基本的な計画（以下「生物多様性地域戦略」という。）を定めるよう努めなければならない。

2 生物多様性地域戦略は、次に掲げる事項について定めるものとする。

一 生物多様性地域戦略の対象とする区域

二 当該区域内の生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関する目標

三 当該区域内の生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関し、総合的かつ計画的に講ずべき施策

四 前三号に掲げるもののほか、生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関する施策を総合的かつ計画的に推進するために必要な事項

3 都道府県及び市町村は、生物多様性地域戦略を策定したときは、遅滞なく、これを公表するとともに、環境大臣に当該生物多様性地域戦略の写しを送付しなければならない。

4 前項の規定は、生物多様性地域戦略の変更について準用する。

第1章 生物多様性、生物文化多様性とは？

1、 生物多様性とその恵み

生物多様性条約には、生物多様性の定義として、「陸上生態系、海洋その他の水界生態系、これらが複合した生態系その他生息又は生育の場のいかんを問わずすべての生物の間の変異をいうものとし、種内の多様性、種間の多様性及び生態系の多様性を含む」と書かれています。国際条約の条文なので難しい言葉で書かれています。わかりやすく言えば、陸上、海洋などあらゆる生態系における生命の多様性のことであり、さまざまな生物種がみられるというだけではなく、森林、草原、河川、海岸などの生息地の多様性や、生物に含まれる遺伝子などの多様性も含むということです。

地球が誕生してから46億年の歴史の中で、海の中で生命が誕生したのは38億年前、現在のような多様な生物が生まれたのは5億4000万年前といわれます。それ以降、地球上では5回の生物の大量絶滅が起こり、最後の大量絶滅は6500万年前の隕石の衝突による恐竜の絶滅です。しかし、現在、第6回目の生物の大量絶滅が起きているといわれます。

国際自然保護連合（IUCN）のレッドリスト（絶滅のおそれのある生物種のリスト）によれば、調査が終わった157,000種の生物のうち、44,000種（28%）が絶滅のおそれのある状態におちいつているといわれます。生物の絶滅の速度は、恐竜絶滅以降の平均の100倍から1000倍と加速度的に増加しており、絶滅の原因は、森林の伐採、気候変動など、ほとんどが人間活動に起因するものです。そのため、地質学者は人類が地球環境に大きな影響を与え始めたこの時代を「人新世（ひとしんせい）」と呼ぶことを提唱しています。



図1. 生物多様性の3つのレベル

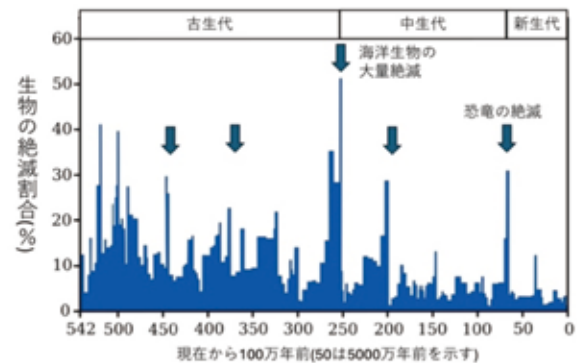


図2. 過去5回の生物の大量絶滅
(出典：Rohde and Muller(2005))

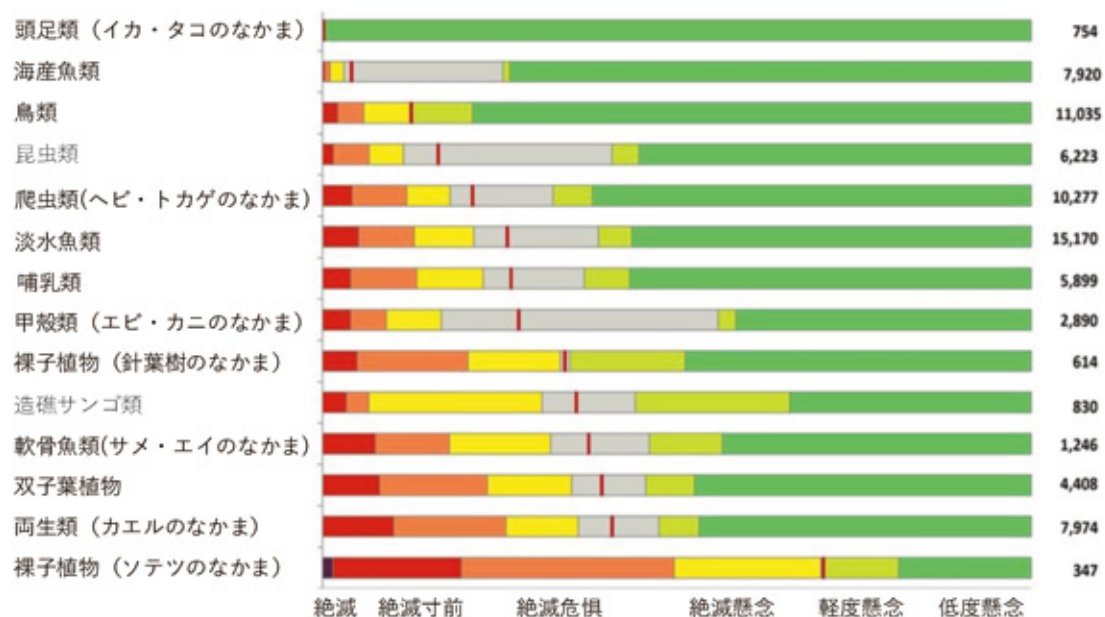


図3. IUCN レッドリストにおける生物の絶滅ランク (出典：IUCN レッドリスト)
(灰色は情報不足、赤線は情報不足を考慮して推定した各分類群の絶滅危惧種の割合)

環境省のレッドリストをみると、日本では田んぼにすむタガメなどの昆虫や秋の七草の一つのキキョウなどの植物までが絶滅危惧種に掲げられています。日本においては、開発による生息地の破壊だけではなく、高齢化に伴う水田の耕作放棄などによる里山の生物の減少が生物多様性の危機の原因となっており、2002年の新生物多様性国家戦略からは、生物多様性の第2の危機²と呼ばれるまでになりました。

生物多様性は、わたしたち人間にさまざまな恵みを与えてくれます。人間が主食としている、米、麦などの穀物は、私たちの祖先がイネ科の野生植物を品種改良して生まれたものです。大豆、小豆、大角豆などの豆類も、マメ科の野生植物を品種改良したものです。トウモロコシ、ジ



図4. 生物多様性国家戦略における生物多様性の4つの危機

² 第1の危機は過剰利用や生息地の破壊による危機、第3の危機は外来種などによる危機、第4の危機は地球規模の気候変動（地球温暖化）による危機です。

ジャガイモ、トマトなどは、アメリカ大陸の先住民が、野生植物を品種改良したものといわれます。食後に飲むお茶やコーヒーも、アジアやアフリカの野生植物を品種改良したものです。

風邪のひきはじめに飲む漢方薬の葛根湯には、クズやショウガの根、ナツメの実などが含まれています。中華料理に欠かせない八角は、トウシキミという植物の実から作られた香辛料ですが、中国の薬草を紹介した「本草綱目」という書物には、健胃剤、鎮痛剤として紹介されています。またインフルエンザ薬として使われるタミフルには、八角から抽出されたシキミ酸が使われています³。このような、食料、薬草などを供給する生物多様性の恵みは「供給サービス」と呼ばれます。

また、森林、海洋などの生態系は、さまざまな生物種とそれをとりまく水、大気などの環境によって成り立っています。森林が山地や丘陵を覆っているおかげで、陸地に降った雨がいきなり川や海に流れ込むことなく、ゆっくりと土に吸収され、地下水となって平野を潤します。海洋は、温まりにくく冷めにくいいため気候を緩和する効果を持っており、さらに人間活動によって大気中に放出された二酸化炭素の 23%を吸収しているといわれています。このような生態系による、洪水・渇水の調整、気候の緩和などの生物多様性の恵みは「調整サービス」と呼ばれます。

さらに、生物多様性は私たちに目に見えない自然の恵みを与えてくれます。それは、森や海辺を歩いたときの心のやすらぎ、野鳥観察やハイキング、釣り、サーフィンなど自然の中でのレクリエーション、自然から得たインスピレーションをもとにした芸術作品などです。これらの生物多様性の恵みは、「文化サービス」と呼ばれています。

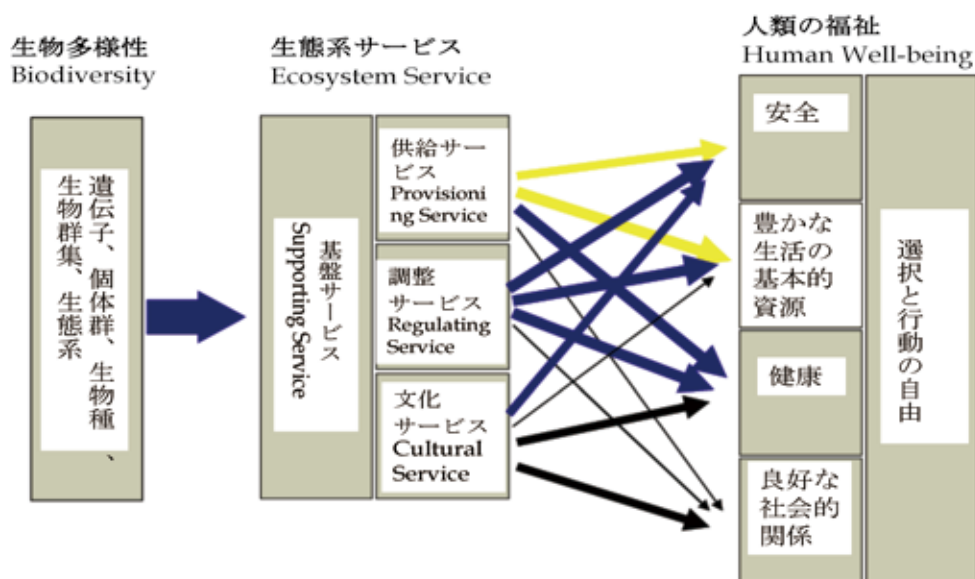


図 5. 生物多様性と生態系サービスの関係 (出典：ミレニアム生態系評価(2005))

³ 現在では、シキミ酸は、遺伝子組み換え大腸菌によって作られています。

これらの生物多様性の恵みは、水、土、大気などの生物の存在基盤である「基盤サービス」を合わせて、「生態系サービス」と呼ばれています。今から20年以上前に、生態学者のロベルト・コンスタンツァらは、科学雑誌「ネイチャー」に投稿した論文で、世界中の生態系サービスを、1年間に160~540億ドル(2.4~8.1兆円)にのぼると試算しています。

2、 生物文化多様性とは？

国連教育科学文化機関(ユネスコ)は、生物多様性条約事務局とともに、「生物文化多様性」という言葉を提唱しています。

2002年にユネスコが採択した「文化の多様性に関する宣言」で、文化多様性とは、「社会あるいは特定の社会集団に独特な精神的、物質的、知的あるいは情緒的なものであり、芸術、文学、生活習慣、集団生活の方法、価値体系、伝統を含む」と定義されています。

2007年に開かれたユネスコの「生物と文化の多様性の関係に関する国際ワークショップ」において、生物文化多様性は、「(その発祥地を問わず)世界のすべての差異の集合であり、すべてのレベルの生物多様性のみならず、個人から社会までの(言語の多様性を含む)すべての表現における文化多様性を含む」と定義されました。

ひとことと言えば、生物文化多様性とは、生物多様性と文化多様性の両方を合わせたものです。しかし、もう一つ大切なことは、生物多様性が文化の多様性を育み、文化の多様性が自然の多様性を育むという相互関係がみられるということです。

たとえば、日本の伝統色という色見本を見ると、日本人が伝統的に表現してきた色の名前には、鶯色(うぐいすいろ)、朱鷺色(ときいろ)などの動物の名前がついたものや、山吹色、浅葱色(あさぎいろ)など植物の名前がついたものが多いのに気づきます。中国の伝統色が、辰砂(しんしゃ、水銀)、紫銅(しどう、青銅)など鉱物や金属に由来するものが多いのと対照的です。降水量が多く、国土の3分の2が森林におおわれ、四季の変化がはっきりしていることが、色の名前にまで反映されています。

一方、日本人が稲作を始めて以来、御田植祭、田植え歌、稲藁を使った正月飾りなどの稲作にまつわるさまざまな文化が生まれました。また水をはった田んぼは、メダカ、ドジョウ、タニシ、トンボのヤゴなどの生息地となり、豊かな生物多様性

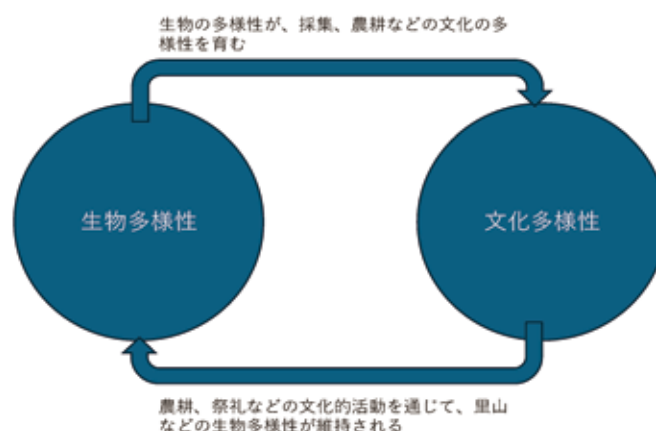


図6. 生物多様性と文化多様性の相互関係

が育まれてきました。しかし、戦後、殺虫薬や除草剤が使用されるようになると、田んぼの生き物たちは一時姿を消してしまいました。近年は、無農薬・減農薬の稲作も増えてきましたが、一方では高齢化に伴い、耕作放棄地が増え、メダカやホタル、アカトンボが減少するなど、里山の生き物たちは再び危機におちいつています。

このように、生物多様性と文化多様性の間には、相互に深いつながりがあり、切っても切れない関係にあります。文化の多様性は、生物多様性の上に成り立っており、文化の多様性を守るためには、生物多様性が保全されることが必要です。例えば、文化財の材料となるさまざまな自然資源（茅葺き屋根に使われるススキやカリヤス、筆築（ひちりき）のリードとして用いられるヨシ、文化財保存に用いられる箱の材料であるキリ等）は、いずれも人が手を入れて管理してきた里地や里山から得られます。また、生物多様性を守るためには、文化多様性が維持されることが必要です。例えば、茅葺屋根のために維持されてきた萱場はカヤネズミの生息地となり、棚田の石積みはカナヘビなどの隠れ家となります。このように、生物多様性の保全と文化財保存の間にも、深いつながりがあります。

そこで本計画は、一宮町の豊かな自然と文化を、将来に伝え、活用するため、あえて「生物文化多様性」という言葉を使った計画とすることにしました。

3、 生物多様性国家戦略とネイチャーポジティブ

2022年12月、カナダのモントリオールにおいて、生物多様性条約の第15回締約国会議(COP15)が開催され、昆明—モントリオール生物多様性枠組⁴が採択されました。この枠組は、2050年までに、「生態系サービスを維持し、健全な地球を維持し、全ての人に必要な利益を提供しつつ、生物多様性が評価され、保全され、回復され、賢明に利用される、自然と共生する社会をめざす」ことを長期ビジョンとしています。また、これを実現するため、2030年までに、「生物多様性を保全、持続可能な利用、遺伝資源の利用から生じる利益の公正かつ衡平な配分を通じ、人々と地球のために自然を回復させる、生物多様性の損失を止めるとともに反転させ

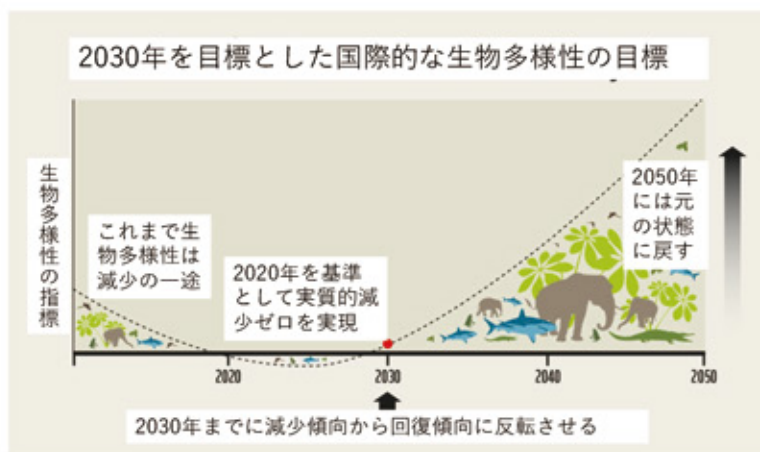


図7. 国際的な生物多様性目標～ネイチャーポジティブ
(出典：ネイチャーポジティブイニシアティブ)

⁴ 第15回締約国会議は、2020年秋に中国雲南省の昆明で開催される予定でしたが、新型コロナウイルス蔓延のため、2022年末にカナダのモントリオールで開催され、昆明—モントリオール生物多様性枠組という名称となりました。

るため緊急の行動をとること」をミッションとしています。2010年に愛知県名古屋市で開催された、第10回締約国会議（COP10）で採択された愛知目標では、「生物多様性の損失を止める」だったものを、2030年までに「反転させる」という意欲的な目標に変えたことが特徴的です。

この意欲的な目標は、「ネイチャーポジティブ」と呼ばれています。具体的には、2030年までに「劣化した生態系の少なくとも30%で効果的な再生が行われている」、「陸域・陸水域、沿岸・海洋の少なくとも30%を保護地域または保護地域以外の効果的な地域をベースとする保全手段を通じて保全・管理する」という目標が掲げられています。

とくに後者の目標は、2030年までに30%をめざすことから、30by30（サーティ・バイ・サーティ）目標と呼ばれています。また、自然保護を主目的とした保護地域ではないものの、都市の緑地公園、企業の工場緑地、森林の保安林、共同漁業権が設定された海域、里山の農業景観など、結果的に生物多様性の保全に貢献する地域は、OECM（オー・イー・シー・エム）⁵と呼ばれ、保護地域を補う保全地域として注目されています。

昆明—モントリオール生物多様性枠組の採択を受けて、日本政府は2023年3月に「生物多様性国家戦略2023-2030」を閣議決定しました。国家戦略には、5つの基本戦略が掲げられています。

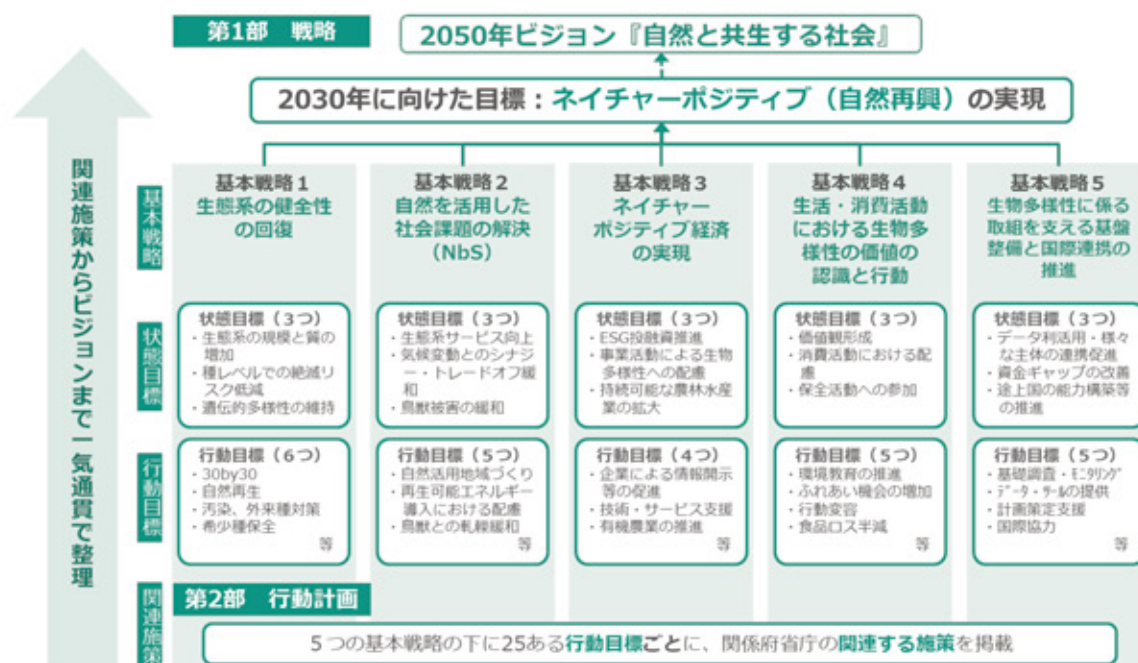


図8. 生物多様性国家戦略2023-2030の基本戦略（環境省提供）

⁵ OECMとはOther Effective area-based Conservation Measuresの略で、国立国定公園など自然保護を主目的とした保護地域ではないものの、自然を持続的に利用することによって豊かな生物多様性を育てている地域（例えば里地里山など）を含みます。

基本戦略1「生態系の健全性の回復」の柱が、国内における30by30の実現です。その実現のため、国立・国定公園などの保護地域の拡大とともに、OECMの認定が掲げられ、2025年1月現在、253ヶ所が「自然共生サイト」⁶として認定されています。

基本戦略2「自然を活用した社会問題の解決」は、ネイチャー・ベースド・ソリューション（NbS: Nature Based Solutionの略）とも呼ばれ、自然災害や気候変動などに対する対策を、コンクリートなどによるハードな対策だけではなく、砂浜や松林などの自然を活用した対策に変えてゆくということを意味しています。

基本戦略3「ネイチャーポジティブ経済の実現」は、事業活動による生物多様性への負の影響を低減し、正の影響を増大させることによって持続可能な社会を実現することをめざした経済を指し、企業に対して、生物多様性をリスクとして捉えるのではなく、新たな機会として前向きにとらえることを提言しています。

基本戦略4「生活・消費活動における生物多様性の価値の認識と行動」では、消費者に対して、ふだんの生活において生物多様性を意識し、消費にあたって生物多様性にプラスとなる消費行動をとることを求めています。

基本戦略5「生物多様性に係る取組みを支える基盤整備と国際連携の推進」では、生物多様性の基礎調査やモニタリングを支援し、地球規模の生物多様性保全のため国際協力の推進を求めています。またここには、生物多様性地域戦略の策定など、地域での生物多様性の保全・活用の取組に関連する地域計画との連携が書かれています。

生物多様性基本法に基づいて策定されている、生物多様性地域戦略等の地域計画は、現在、47都道府県、156市区町村にのぼります。千葉県では、2008年に県が生物多様性ちば県戦略を策定したのについで、8つの地方公共団体が、生物多様性地域戦略を策定しています。一宮町では、2023年に改訂された生物多様性国家戦略2023-2030に則り、さらに生物文化多様性という新しい考え方を取り入れた計画として、一宮町生物文化多様性計画を策定するものです。

⁶ 千葉県からは、千葉市の植草共生の森、堂谷津の森、柏市の下田の杜、松戸市の天神山樹林、我孫子市のNEC我孫子事業所（四つ池）、印西市の竹中工務店技術研究所調の森SHI-RA-BE、富里市の八ツ堀のしみず谷津、袖ヶ浦市の東京ガス袖ヶ浦LNG基地、君津市の君津グリーンセンター（旧樹芸林業試験場）、芝山町のグリーンポート エコ・アグリパークの10ヶ所が、自然共生サイトとして認定されています。

第3章 一宮町の生物文化多様性

1、一宮町の地形と地質

一宮町の地形は、外房線の西側の台地、外房線の東側の低地、一宮川などの河川と九十九里浜の海岸からなっています。

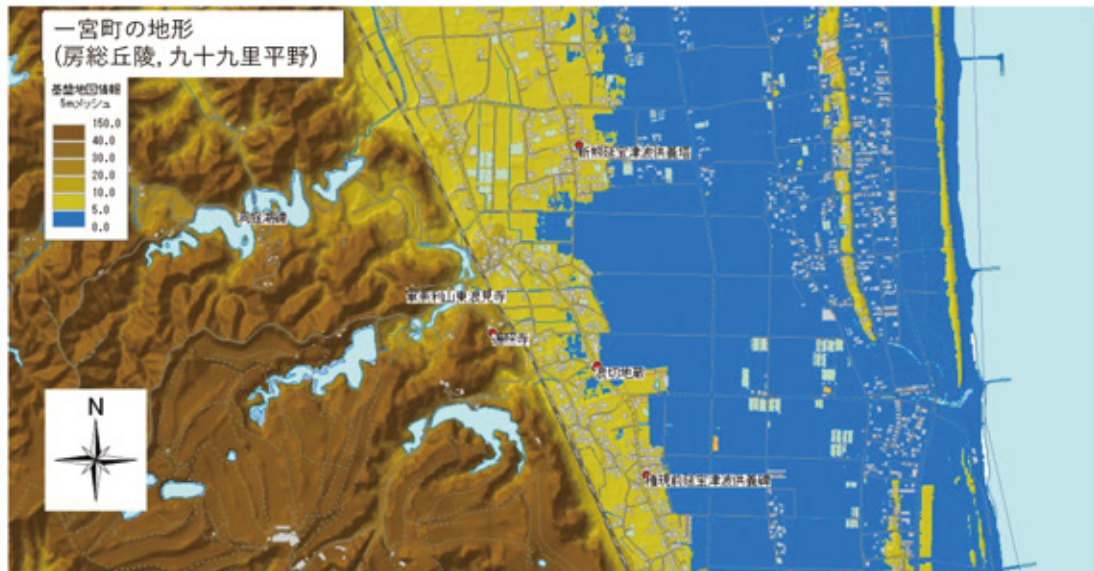


図9. 一宮町の地形 (国土地理院国土基盤地図情報をもとにGISで作成)

6,000年前の縄文時代、一宮町東部の低地はまだ海の中でした。海は茂原付近まで広がっていました。気候が徐々に寒冷化し、海岸が引いて行くにしたがって砂が堆積し、九十九里浜の海岸が生まれました。気候が安定した時に、砂が堆積した砂丘が生まれ、現在も海岸近くに砂丘が残っています。気候は再び温暖化に向かい、太東岬からの土砂の供給が減少し、一宮町付近の九十九里海岸は浸食を受けています。

長柄町に端を発する一宮川は、茂原市を經由し、長生村で長南町から流れる埴生川、睦沢町から流れる瑞沢川と合流し、一宮町を通り海に注いでいます。

上総丘陵(台地)では、第三紀後期(約240万年前)から第四紀後期(約50万年前)にかけて、海底で堆積した砂や泥が交互に層をなしています。このような、洞庭湖の入口付近の露頭(ろとう:地層の断面が見える場所)で見ることができます。

九十九里浜を含む沖積低地は、第四紀完新世後期(約1万年前)に気候が温暖から寒冷に転じ、海岸線が後退(海退)する過程で生まれました。九十九里浜は約60kmの長さで約10kmの幅がある日本最大の海岸平野であり、海岸線に平行してやや高い浜堤列(ひんていれつ)とやや低い堤間湿地が交互に見られます。一宮町では、桜通りの西側に浜堤が残っています。しかし、九十九里浜には、土砂を供給する大規模な河川がないことから、土砂の供給はもっぱら北の屏風浦、南の太東岬からの供給に限られます。現

在では、いずれも海岸侵食防止の措置がとられ、海岸に供給される砂が少なくなり、一宮町付近では、海岸の侵食が進んでいます。

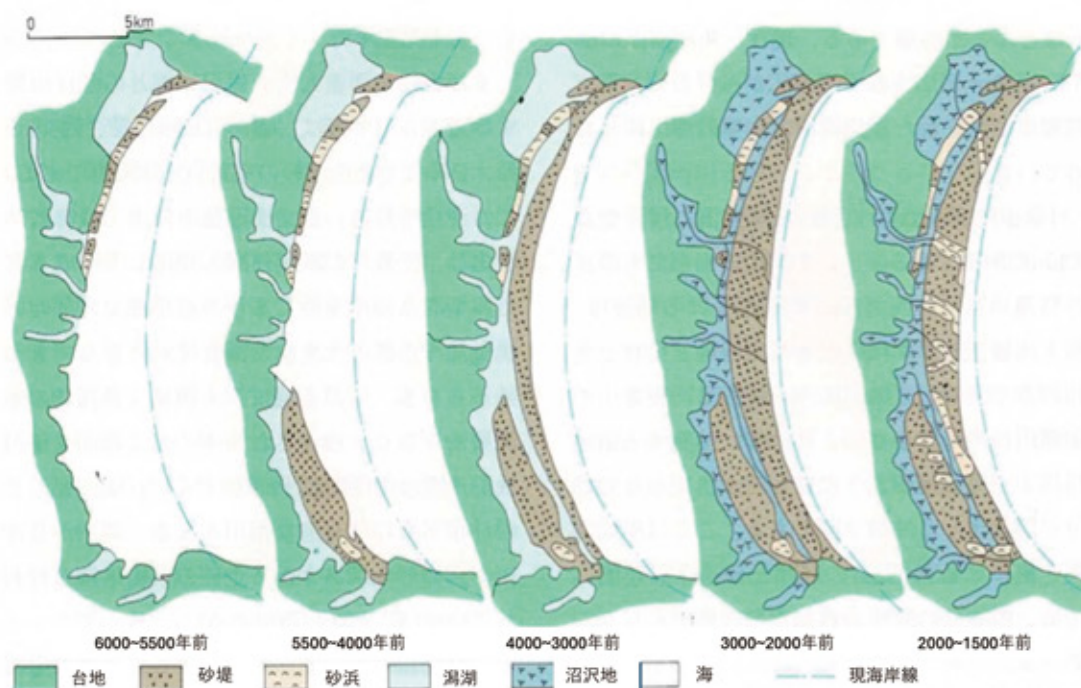


図 10. 九十九里平野の変遷 (出典：「千葉県自然誌 本編 I」、原図：森脇(1979))

2、一宮町の生物

千葉県は、暖温帯から冷温帯に移り変わる地域にあります。そのため、台地上は、スダジイ、アカガシなどからなる常緑広葉樹林、コナラ、クヌギなどの落葉広葉樹の二次林⁷、スギやヒノキの人工林⁷におおわれ、谷津には水田や畑、梨などの果樹園が広がっています。台地上の森林では、夏になると渡り鳥のサンコウチョウやキビタキ、クロツグミなどの声も聞くことができます。軍荼利山の植物群落は、スダジイを中心とする常緑樹林におおわれ、ハイハマボッサ、カゴノキなどの希少な植物がみられます。そのため、千葉県指定天然記念物に指定されています。

洞庭湖、大欠堰、親ノ谷池などのため池は、江戸時代から昭和にかけて開発された農業用のため池であり、カワセミ、カイツブリなどが繁殖しています。また、ため池近くの町営憩いの森(いこいの森)には、キキョウ、シュンラン、ノハナショウブ、などの植物が見られます。また、松子地区の田んぼや溪流にはゲンジボタル、ヘイケボタル、ミナミメダカ、ドジョウ、トウキョウサンショウウオなどの水生生物が見られます。

九十九里浜の海岸には、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、コウボウムギ、コウボウシバ

⁷ 二次林とは、自然林に人が手を入れ、薪炭林などとして利用してきた結果できた、二次的な森林。人工林とは、人が人工的にスギ、ヒノキなどの苗木を植えた森林のことです。

など、砂が動く海浜の環境に適応した植物がみられます。これらの植物は、砂の移動を抑え、砂丘を維持し、砂浜の生態系を保全する働きをしています。砂丘にはかつてマツ林が広がっていましたが、マツノザイセンチュウのため枯死し、美しい白砂青松が失われています。マツ林の残る砂丘には、世界でも一宮町でしか発見されていないカヤツリグサ科の植物イソハマアオスゲが生育しています。

砂丘の背後にある水田の周辺には、コサギ、ダイサギ、アオサギ、タゲリなどの姿が見られます。また、水田と一宮川を結ぶ用水路には、かつては多くのウナギ、モクズガニなどが遡上していましたが、現在では少なくなっています。

一宮川には、九十九里浜で唯一の河口干潟があり、甲殻類や貝類など多くの底生動物が生息しています。1975年には新種のヒガタスナホリムシ (*Euridice akiyamai*) が発見され、発見者である一宮町在住の故秋山章男教授の名前が種小名につけられました。干潟には、これらの底生生物を餌とする渡り鳥が飛来することから、環境庁のシギ・チドリ重要渡来地に指定されました。なかでも、ミュビシギは、九十九里浜が日本有数の越冬地であること、渡りの時期には1400羽に及ぶ大群が飛来すること、オーストラリアと北極圏を結ぶ渡りの中継地として重要であることなどが明らかになっています。また、世界的にも珍しいクロツラヘラザギの飛来も確認され、干潟は渡り鳥の国際空港とも言えます。

また、一宮海岸から太東海岸にかけての砂鉄分を含む黒い砂浜は、アカウミガメの北限の産卵地であり、九十九里浜の中でも最も多くの産卵が記録されています。また砂浜や砂丘には、シロチドリやイソヒヨドリなども生息しています。

さらに九十九里浜から続く遠浅の海には、ダンベイキサゴ (ナガラミ)、ハマグリなどの貝類や、イシモチ、ボラ、イワシなどの魚類が生息しています。海岸に近い浅い海域には、砂地を好む小型の鯨類スナメリが生息し、群れで魚を追いつめ捕食します。魚を好んで食べ、別名魚鷹 (うおたか) とも呼ばれるミサゴが、海に飛び込んで足で魚を捕獲するようすも見られます。

房総沖の海は、暖流の黒潮と寒流の親潮の影響を受け、ここを北限とする生物と南限とする生物の両方が出現します。とくに一宮町の海岸は、一宮川の河口干潟、一宮海岸から太東海岸にいたる砂浜、その南には、太東岬から連なる海藻の海中林を持ついすみ根などさまざまな環境を有することから、多種多様な生き物たちの宝庫となっています。太平洋の荒波が打ち寄せる遠浅の海岸には、嵐のあとには、サメの卵囊、甲殻類など、いすみ根に由来する生物を含む、さまざまな海洋生物の漂着が見られ、それらを餌とする多種多様な生き物の生息地となっています。

九十九里浜の海岸線から県道30号線までの間は、千葉県立九十九里自然公園の第3種特別地域に、県道30号線から浜堤までの間、外房線より下流の一宮川河口、外房線の西側の軍荼利山～洞庭湖～松子～大欠堰～親ノ谷池～高藤山にいたる地域は千葉県立九十九里自然公園普通地域となっています。

一宮町には、1087種の陸上植物、417種の脊椎動物、797種の無脊椎動物が記録されています。このうち陸上植物は、ノハナショウブ (B)、オオバヤドリギ (B)、キキョウ (B) など91種、脊椎動物は、スナメリ (B)、サンコウチョウ (A)、トラツグミ (A)、アカウミガメ (A)、トウキョウサンショウウオ (A)、ニホンアカガエル (A) など143種、無脊椎動物では、マシジミ (A)、オツネトンボ (A) など88種が千葉県レッドリスト⁸に掲載されています。

3、一宮町の文化

一宮町は太平洋に面し、古代より一宮川河口付近が、海上交通と内水面交通・陸上交通の結節点となっていました。そこには、黒潮を通じた九州や紀州などとの交流の痕跡が残されています。たとえば、上総国一之宮玉前神社のご祭神は、『古事記』に記載のある玉依姫 (たまよりひめ) であり、釣ヶ崎海岸がその上陸地と伝えられますが、これは九州の日向地方の伝承と類似しています。また戦国時代末期には、紀州から九十九里浜に漂流した漁民が地曳網を伝え、江戸時代から近代まで地域の経済を大きく発展させました。

玉前神社も、一宮川下流域を支配した古代豪族が、河川・陸上交通路と海洋交通路との結節点である位置に、その守護の意味から設営され、それが勢力を広げるにしたがって、上総国一之宮に認められました。そして、その物資集散の拠点が、江戸時代以降、一宮町の市街地に発展したものと思われます。海と川・陸の交通の結節点、物流の拠点としての位置づけは、一宮町の文化を考える上で、まずふまえるべき点であると考えられます。

平安時代末期には、上総国に強大な勢力を築いた平広常 (上総広常) の根拠地となり、戦国時代には里見氏・北条氏の係争地となり、中世以降は武家の活動が活発な地域となりました。江戸時代末期には、太平洋上に出没する外国船に対する国土防衛の拠点として、譜代大名の加納家の藩庁がおかれ、一宮藩主の主導によって、各種の殖産興業施策、文化教育施策が行われるようになりました。住民の意識には、現在でも、一宮は城下町、東浪見は天領であったとの誇りがあります。

一宮から東浪見にかけての海岸は約7kmあり、広い砂浜と遠浅の海で、チョウセンハマグリやナガラミ (ダンベイキサゴ) を産します。江戸時代になり、地曳網が盛んになり、カタクチイワシを中心に漁獲高が増大しました。綿花などの栽培が盛んになり、干鰯 (ほしか、肥料) の需要が高まると、網元には巨大な富の蓄積が行われました。一宮市街地には漁撈作業後の労働者の需要を背景に遊興や賭博の場がうまれ、博徒の力も伸長しました。こうした漁業の繁栄をふまえた文化的要素も、浜言葉といわれる荒っぽい言葉遣いとともに、現在までその余韻を伝えています。

⁸ 千葉県レッドリストでは、(A) は最重要保護生物、(B) は重要保護生物を意味しています。ここに記載した生物種の数は、2025年3月時点のもので、調査が進むにつれて生物種の数が増加します。

一宮町の東部平坦地には農村集落と水田が展開しています。九十九里浜は給排水の困難さから稲作の生産力はおおむね低かったものの、一宮町の場合は西部の丘陵地にため池を築き給水を行ったので、稲作は一定程度可能でした。集落は、海岸に平行して残る海岸砂丘上に位置し、海岸まではほぼ平坦な地続きなので、この地域の住民は地曳網漁の中心的な担い手でした。住民は半農半漁の生活形態と文化を有したといわれます。現在では、この地域では温室を用いたトマト・キュウリ・マスクメロンなどの作物が栽培されています。

西部丘陵地には里山が展開しており、その山裾に谷津田を開墾し、屋敷を構えた形の集落が見られます。湧き水が少ないため、ため池による灌漑が重要な役割を果たしています。住民は屋敷裏山の雑木林から薪炭などの生活物資を採取する、いわゆる里山文化が成立していました。現在では、谷津田や山裾の平地では梨の栽培が行われています。

江戸時代以降、市街地の地元有力者のもとに、江戸方面から文化人も多く訪れるようになり、活発な文芸活動が行われました。また、江戸時代後半から一宮藩による藩校(崇文館)の活動も活発に行われ、明治以降の教育へとつながりました。江戸時代末期には、一宮町市街地は東上総地域の都市的文化活動の中心でした。

また、一宮町の文化として、特筆すべきこととしては、一宮川が存在があります。水質がよく、魚介類が豊富で、江戸時代から献上蛸(しじみ)の産地として知られていましたが、明治以降、一宮川兩岸の別荘地としての繁栄とともに、釣り、投網、水泳など、川遊びの拠点として昭和後半まで大いに賑わいました。戦前期、海に立地した別荘地は多くありますが、川の魅力も備えたところは多くはありません。一宮の近代文化のひとつの特徴であるといえます。

現在では、1970年代から移入が本格化したサーフィンが、単なる娯楽の域を超えて、ひとつの文化として定着しつつあります。サーフィンを楽しむ人が、現在来訪者だけで年間70万人。住民のうち、少なくとも2000~3000の人がなんらかの形でサーフィンと縁を持っていると推定されます。2021年にはオリンピック史上はじめてのサーフィン競技が釣ヶ崎海岸で行われました。海岸部には、サーフィン需要を背景に、県道沿いに新市街地が形成され、発展しています。サーフィンは、ハワイやアメリカにおいて文化として確立したのですが、一宮町のサーフィン文化も、ハワイやアメリカの色合いを帯びています。サーファーの方々は、自然との共生を希求する気風が強く、環境保護への意識が高い傾向があります。

4、一宮町の土地利用と産業

一宮町は大きくいくつかの地域に区分され、それぞれの文化を支える特色ある土地利用と産業が展開しています。大きくいえば、国道128号と外房線の東部と西部で町の地勢は大きく二分されます。東西の境界の、丘陵の山裾の部分に沿って、古くからの街道と集落が南北に発展しています。この街道(現在の国道128号)は、一宮町市街地から、

玉前神社前を通り、東浪見の集落を経て東浪見の釣地区へと続いています。これは縄文時代の海岸の海蝕崖のふもとの微高地にあり、防災上も安全なところではあります。

一宮町市街地は、海の輸送路と、内水面・陸上の輸送路の結節点として、一宮川の流域と、旧海蝕崖が接するあたりに発展しました。ここは、江戸時代から商業とサービス業を中心とする都市的な発展がみられ、都市的集積が進んでいた地域です。1980年代までは、地域の日常的消費の拠点として商業・サービス業が大いに繁栄しましたが、現在はモータリゼーションの波の中で、空洞化し、空き店舗・空き住宅も多くなっています。交通の便もよく、防災上も安全なところなので、今後、代わりなどの機会に再利用してゆくことが望まれます。

一宮川の北岸から、東浪見南部までの東部平坦地は、主として水田として農業に用いられてきました。一宮川の沿岸は、明治までは湿地でしたが、のちに水田として開発されました。農村集落は、水田の中に残る旧海岸砂丘の上、微高地に、南北に連なりながら、展開しています。

戦後になると、この地域の農地に温室が整備され、トマト、キュウリ、メロンの栽培が広範に展開するようになりました。東京の市場で歓迎され、ブランドを確立し、高い評価を受けています。

現在、当該地域の農地の中核部分は、基盤整備を済ませ、農業振興地域に指定されており、引き続き農地として使われていますが、高齢化と後継者不足により、活力が減退しつつあります。これを新たな取り組みによって再活性化することが目下の課題です。なお、元来土水路であり、田面にも通年水があった時代には、いたるところで多様な生物相が見られましたが、現在はコンクリートの U 字溝が整備され、給排水が効率よく行われるようになったものの、生物相は単調となってしまいました。

一方、海岸部の県道 30 号線周辺から、神の道(かんのみち)までの間、また一宮川の両岸は、農業振興地域に指定されていないため、現在急速な住宅地化が進んでいます。この地域は海や川に近い平坦な地勢のため、日常的な海や川の利用には便利ですが、津波災害や洪水災害に対しては潜在的な危険を免れません。発災時の速やかな的確な避難の確保が課題です。

海岸部には、かつては広大な砂浜が広がっており、また近代以降は植樹によってクロマツの保安林が展開していました。現在では、海岸浸食により砂浜が細ってしまい、浸食を防ぐためのヘッドランドが建設され、景観は大きく変わっています。クロマツの保安林は、マツクイムシの被害がひどく、樹林は消滅してしまいました。現在、新たに植林が行われ、松林の草刈など、保安林の再生、復活に向けた努力が行われています。

海岸の利用は、現在はサーフィンが中心で、ほぼ海岸線の全域にわたっています。保安林はかつては肥料としての松葉の採集などが行われましたが、現在は行われていません。

海岸の県道の両側は、かつては松林と芋畑しかないといわれた地域ですが、1970年

代以降サーフィン文化が移入され、サーフィンの需要を背景に発展し、現在は玉前神社周辺の旧市街地をしのぐ勢いです。この地域は、サーフショップやレストラン・カフェ・宿泊施設など、各種サービス業が展開しており、いわゆるウェスタンテイストの町並みとなっています。

西部里山地域には、谷津の奥にため池がつくられ、そこから流れ出す水路の両脇に、山の裾野に沿って集落が構成され、水路脇の平地に谷津田を中心とする農地が展開しています。一宮町の丘陵地には、湧き水が少なく、灌漑は主としてため池によって行われています。谷津田は、大きな農業機械の利用も難しく、日照の問題もあって生産性が高くないため、現在は放棄され荒廃農地となっているところも増えています。また、内宿・柚の木及び綱田地区では、梨の果樹園として転用されているところも見られます。昭和の初め頃には綱田の梨が献上梨となったこともありました。しかし、現在では果樹園を廃業する農家も増えています。

里山は、かつては住民の燃料・肥料・食料の採取地として日常的に用いられていました。定期的な伐採も行われ、スギやクロマツなどの常緑針葉樹、クヌギやヤマザクラなどの落葉広葉樹、スダジイやヤブニッケイなど常緑広葉樹などの混交した疎林であったと考えられます。また、モウソウチクやマダケなどの竹林も広くみられたと思われます。二次林として多様な生物相を示し、豊かな環境でしたが、現在では、二次林や竹林の利用は全く途絶え、常緑樹の混じった林になり、林床は日光も入りにくくなり、生物相は単調になりつつあります。なお一宮町南部では、樹林が切り払われ、芝生が整備され、ゴルフ場としての利用がなされています。また、軍茶利山から大欠堰に至る里山は、昭和40年に県立九十九里自然公園に追加指定され、軍茶利通りは関東ふれあいの道⁹に指定されていますが、十分な管理がなされていません。

一宮川は、かつてはすぐれた水質と豊かな漁獲物で、近辺の住民によって日常的に利用されていました。特に明治以降、両岸が別荘地として発展すると、川遊びの醍醐味が広く認識され、釣り・投網・遊泳・舟遊びなどで賑わいました。1970年代以降、一宮川中流部の工業都市としての発展により、水質悪化を招き、こうした川の利用は失われてしまいました。現在は水質の改善が進み、釣りなども行われていますが、往時の面影は失われてしまいました。一方、川の両岸の地域への住宅の展開が進み、大雨時の川本流からの氾濫の懸念が、以前より深刻化しています。1997年の豪雨時の氾濫を機に行った川幅の拡張により、その後は本流の氾濫は起こっていませんが、津波時の津波遡上による被害も考慮すべき要因となっています。一宮川については、現在、洪水や津波に対する防災対策が優越していますが、川と人々との日常的暮らしとのつながりを回復することが、今後の課題です。

⁹ 関東ふれあいの道は、首都圏自然歩道の愛称で、関東の全都六県をぐるりと一周する自然歩道であり、総延長は1,799 kmに及びます。一宮町には、「大海原を眺める道（睦沢町公民館から東浪見駅）」、「九十九里浜の砂浜をふみしめて歩く道（東浪見駅～長者町駅）」の2ルートが通っています。

第4章 一宮町生物文化多様性計画

1、 スローガン

緑と海と文化をひらく いちのみや

2、 生物文化多様性の保全

(1) 重要な生物文化多様性のリストアップ

・一宮町の重要な生物、重要な文化財のリストを作成します。とくに保護が必要とされる生物については一宮町版レッドリストを作成し、必要な保全対策をとります。

(2) 生物文化多様性保全上重要なエリアの選定

・一宮町の生物文化多様性を保全する上で、重要な地域を選定します。とくに緊急に保全が必要な地域については、国の法律（自然公園法、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律、文化財保護法等）、県の条例、町の条例などを活用して保全対策をとります。

・一宮町全域を、世界サーフィン保護区に登録するため、必要な条件を満たすための調査を実施し、登録に向けた関係者との協議を行います。

・千葉県立九十九里自然公園を国定公園に格上げする可能性の検討を行い、国、県、関係市町村と協議します。

・一宮町の生物多様性保全上重要な里山地域を調査し、地権者、管理団体とも協議の上、自然共生サイト候補地として環境省に申請します。

(3) 海辺の保全に関する提案

・ウミガメの産卵地の保全のため、一宮町ウミガメ保護条例に基づき、ウミガメおよびその卵の保護にあたりとともに、ウミガメが産卵する海岸の保護に関する計画を策定します。とくにウミガメの産卵の場として重要な海岸を選定し、重点的な保全対策をとります。

・ウミガメが産卵のため上陸し、サーフィンが楽しめる砂浜の保全のため、コンクリート等によるハードな対策のみならず、自然を活用した社会課題の解決（ネイチャー・ベースド・ソリューション）の考え方にもとづいた対策を検討します。

・海岸のプラスチックゴミを減らすため、定期的な清掃活動を実施するとともに、プラスチックゴミの削減のための対策を講じます。

・海岸砂丘上の松林の保全・再生をはかるとともに、一宮町に固有のイソハマアオスゲをはじめとする植物の保全をすすめます。

(4) 里山の保全に関する提案

- ・一宮町の生物多様性保全上重要な里山の管理に対して、森林環境譲与税等を活用した森林整備、人材育成、普及啓発につとめます。森林環境譲与税を活用した整備については、関係各所の意見を伺いながら、進めます。
- ・一宮町の生物多様性保全上重要な里山のモニタリングに対して、農林水産省の多面的機能支払交付金、環境省のモニタリング 1000 里地調査などの枠組みを活用し、生物多様性のモニタリングに基づいた保全対策につとめます。
- ・一宮町の生物多様性保全上重要な里山を選定し、地権者、管理団体とも協議の上、自然共生サイト候補地として環境省に申請します。
- ・令和 7 年 4 月に施行される、「地域における生物の多様性の増進のための活動の促進等に関する法律（以下、生物多様性増進活動促進法）」に基づいた、連携地域生物多様性増進計画の作成を検討します。
- ・里山への粗大ゴミの投棄を防止するため、定期的に清掃を行うとともに、粗大ゴミの投棄防止のための普及啓発を図ります。町民によるボランティア清掃活動を支援します。

(5) 文化の保存に関する提案

- ・『新編 一宮町史』の編さんを通じて、一宮町の文化遺産に関する研究をすすめるとともに、重要な文化遺産については、必要に応じて町の文化財指定を含む検討を行います。
- ・一宮町の文化遺産に関して、これまで調査が不十分な文化的景観、産業遺産、戦争遺産などについても調査を進め、重要な文化財については、必要に応じて町の文化財指定を含む検討を行います。
- ・一宮町の文化遺産に関して、県や町の文化財として指定・登録されている文化財のみならず、身近な文化遺産を含めて、町民に紹介する冊子やマップの発行などの普及啓発活動を行います。
- ・一宮町の里山のみならず文化財についても、町民の有志によって保全活動を行う「自然・文化サポーター制度」を創出し、町が指定した地域、史跡について、月 1 回程度の活動日を設けて草刈等を行います。

(6) 人材の育成・生物文化多様性の普及啓発に関する提案

- ・一宮町の自然や文化を学ぶ「一宮学」のテキストブックを作成して、一宮町の小中学生をはじめとする全ての町民が、一宮町のことを学び知る機会を作ります。
- ・一宮町の自然を地図化した「一宮町いきものボード」を作成し、生物多様性の

普及啓発を図ります。

- ・毎年、啓蟄（けいちつ）の日（3月5日または6日）を「一宮町生物文化多様性の日」とし、一宮町の自然や文化を普及する機会とします。
- ・一宮町の生物文化多様性の普及啓発をはかるため、ガイド養成制度を創設し、一宮町の自然や文化を解説できる町民を増やします。
- ・海辺の保全、里山の保全、文化の保存などに携わる人材を育成するため、ボランティアに対する研修の機会の提供、活動日数に応じたポイント付与制度などインセンティブ（奨励措置）につながる制度の創出を検討します。

(7) 生物文化多様性の保全に関する目標

- ・令和8年度までに、世界サーフィン保護区の申請を行います。
- ・令和9年度までに、自然共生サイトの申請を行います。
- ・令和10年度までに、「一宮学」のテキストを作成します。

3、 生物文化多様性の活用

(1) 小中学校、高等学校等における生物文化多様性の活用

- ・一宮町立小中学校において、総合的な学習の時間などを活用し、一宮町の自然や文化を学ぶ教育を継続します。郷土の自然や文化を学ぶ教育活動の実施にあたっては、地域の関係団体等との連携を図ります。
- ・県立一宮商業高等学校における、郷土の自然や文化を学ぶ教育活動を支援するとともに、小中学校や地域の関係団体等との連携を図ります。
- ・船橋市立一宮少年自然の家における、一宮町の自然や文化を学ぶ教育活動を支援するとともに、少年自然の家と町内の小中学校や地域の関係団体等との連携を図ります。
- ・町内の保育施設における自然教育の推進を支援します。

(2) 生物文化多様性のまちづくりへの活用

- ・一宮町の豊かな自然と文化の魅力を発信し、移住したくなり、住み続けたいくなる一宮町のまちづくりに活用します。
- ・郷土資料館、自然文化資料展示室など、一宮町の自然と文化の保存活用の拠点となる施設の設置を検討します。
- ・生物多様性の回復（ネイチャーポジティブ）と脱炭素（カーボンニュートラル）を両立できるような再生可能エネルギーの導入を検討します。

(3) 生物文化多様性を意識した産業の振興

- ・農業、観光業などの一宮町の産業において、一宮町の生物文化多様性を意識し

たブランド化を検討します。

- ・一宮町の海岸の松林を、生物文化多様性の学びの場としての活用の検討をします。松林を防災林としてのみならず、自然とのふれあいの場として活用することによって、観光の活性化や雇用創出等、保全と利用を両立する方法を検討します。

(4) 生物文化多様性の活用に関する目標

- ・令和 10 年度までに、「一宮学」のテキストを活用した、学校教育、社会教育における試行を行います。

- ・令和 12 年度までに、生物多様性に関する認知度（生物多様性という言葉聞いたことがあり、意味も知っている人の割合）を 20%に高めます。

4、 生物文化多様性の保全・活用に必要なこと

(1) 行政と町民との協力関係

- ・一宮町の豊かな自然と文化を将来に伝えるためには、行政と町民との協力関係の強化が求められます。本計画策定後も、町と地域団体との定期的な話し合いの場を設けます。

- ・とくに環境が大きく変わる工事などが行われる場合には、事前に町民への説明会や環境保護団体への相談を行うこととします。

(2) 行政と産業との協力関係

- ・一宮町の豊かな自然と文化を将来に伝えるためには、行政と地元の産業との協力関係が必要です。町と地元産業との間の定期的な話し合いの場を設けます。

(3) 資金の調達

- ・本計画策定後、ただちに、一宮町ネイチャーポジティブ宣言¹⁰を行うとともに、生物多様性増進活動促進法¹¹に基づく、連携地域生物多様性増進活動の促進に取り組みます。

¹⁰ ネイチャーポジティブ宣言とは、J-GBF（2030 生物多様性枠組実現日本会議）の呼びかけに応じて、企業や自治体などが宣言を行うもので、2024 年 9 月現在、85 団体（うち自治体は 11 自治体）が宣言を行なっています。

¹¹ 生物多様性増進活動促進法とは、令和 6 年に制定され、令和 7 年に施行される法律で、地方自治体と企業、NPO 等が協力して、地域の生物多様性増進活動を行うことを支援する制度です。

- ・ネイチャーポジティブ支援プログラム¹²を活用し、一宮町外に本社を置く企業と一宮町、自然保護団体の三者協定の締結をめざします。企業版ふるさと納税制度を活用し、一宮町の生物文化多様性の保全のための資金を調達します。

(4) 計画の見直し

- ・本計画は、令和7（2025）年4月より実施し、4年が経過した令和9（2027）年度に中間点検、8年を経過した令和12（2030）年度に最終点検を行います。
- ・本計画の継続が必要であると認められた場合は、令和13（2031）年度以降の計画を改訂版として策定します。

¹² 公益財団法人日本自然保護協会が、令和5年に開始した日本版ネイチャーポジティブアプローチ（市町村を基にした生物多様性保全）を支援するため、市町村にネイチャーポジティブ自治体認証を、企業にはネイチャーポジティブ貢献証書を発行する制度。

資料

- 1、 一宮町の生物リスト（第一次リスト）
- 2、 一宮町の文化財リスト
- 3、 一宮町の自然に関する小学生アンケート
- 4、 一宮町生物文化多様性計画策定委員会設置要綱
- 5、 一宮町生物文化多様性計画策定委員会委員名簿

資料 1. 一宮町生物リスト (第一次リスト)

植物界

維管束植物門

裸子植物下門

ソテツ科	ソテツ
イチョウ科	イチョウ
マツ科	モミ、クロマツ、アカマツ、ダイオウショウ、ヒマラヤスギ、ツガ
マキ科	イヌマキ
ヒノキ科	ヒノキ、サワラ、スギ、コウヨウザン、メタセコイヤ、ヒヨクヒバ、シノブヒバ、コノテガシワ、イタリアサイプレス、アスナロ、イブキ、ネズ、カイズカイブキ
イチイ科	イヌガヤ、イチイ、キャラボク、カヤ

被子植物下門

スイレン科	スイレン
マツバサ科	シキミ、サネカズラ
センリョウ科	センリョウ、フタリシズカ
ドクダミ科	ドクダミ、ハンゲショウ
コショウ科	フウトウカズラ
ウマノスズクサ科	ウマノスズクサ、カントウカンアオイ
モクレン科	ホオノキ、シデコブシ、コブシ、モクレン、ハクモクレン、タイサンボク、カラカネオガタマ、ユリノキ
クスノキ科	クスノキ、ヤブニッケイ、ニッケイ、ゲッケイジュ、クロモジ、カゴノキ、タブノキ、ホゾバタブ、シロダモ、イヌガシ
ロウバイ科	ロウバイ
ショウブ科	ショウブ、セキショウ
サトイモ科	ウラシマソウ、マムシグサ、ミミガタテンナンショウ、カラスビシャク、ウキクサ
オモダカ科	へらオモダカ、オモダカ、アギナシ
アマモ科	コアマモ、スガモ
ヤマノイモ科	ヤマノイモ、オニドコロ
イヌサフラン科	ホウチャクソウ、チゴユリ
サルトリイバラ科	サルトリイバラ
ユリ科	ウバユリ、ヤマユリ、オニユリ、シンテッポウユリ、タカサゴユリ、ホトトギス、シロバナホトトギス、ハナニラ、アツバキミガヨラン、ニオイシュロラン
ラン科	エビネ、キンラン、ササバギンラン、ギンラン、サイハイラン、シュンラン、クマガイソウ、ナヨテンマ、ミヤマウズラ、ムヨウラン、ムカゴソウ、コクラン、ジガバチソウ。ニラバラン、ムカゴトシボ、トンボソウ、ネジバナ
アヤメ科	ヒメヒオウギズイセン、ノハナショウブ、シャガ、キショウブ、ニワゼキショウ
ヒガンバナ科	ノビル、ヤマラッキョウ、ハマユウ、ヒガンバナ、キツネノカミソリ、ナツズイセン、スイセン
クサスギカズラ科	ハラン、ツルボ、キヨスミギボウシ、コバギボウシ、ヒメヤブラン、ヤブラン、ジャノヒゲ、ノシラン、オオバジャノヒゲ、ナガバジャノヒ

	ゲ、アマドコロ、ナルコユリ、キチジョウソウ
ヤシ科	シュロ、カナリーヤシ、ヤタイヤシ、ココヤシ
ツユクサ科	ツユクサ、シロバナツユクサ、マルバツユクサ、トキワツユクサ、ムラサキツユクサ、イボクサ、ヤブミョウガ
ミズアオイ科	ホテイアオイ、コナギ
ショウガ科	ハナミョウガ、ミョウガ
ガマ科	ミクリ、ガマ、コガマ、ヒメガマ
イグサ科	クサイ、イ、ホソイ、コウガイゼキショウ、タチコウガイゼキショウ、ハナビゼキショウ、スズメノヤリ
カヤツリグサ科	ウキヤガラ、マツバスゲ、コウボウムギ、カワズスゲ、マスクサ、タカネマスクサ、オオアゼスゲ、アゼナルコ、ゴウソ、ナクリスゲ、オタルスゲ、テクリスゲ、ヒゲスゲ、カンスゲ、ミヤマカンスゲ、コミヤマカンスゲ、ヒメカンスゲ、モエギスゲ、ノゲヌカスゲ、イトアオスゲ、メアオスゲ、イソアオスゲ、イソハマアオスゲ、ハマアオスゲ、オオアオスゲ、カタスゲ、タチスゲ、コジュズスゲ、ジュズスゲ、ナルコスゲ、シラスゲ、アイノコシラスゲ、ヒゴクサ、アワボスゲ、ヤワラスゲ、カサスゲ、ウマスゲ、ミクリスゲ、シオクグ、コウボウシバ、ヒメクグ、イガガヤツリ、アゼガヤツリ、ギンガヤツリ、タマガヤツリ、アオガヤツリ、ウシクグ、カヤツリグサ、コゴメガヤツリ、ミズガヤツリ、ハマスゲ、クロハリイ、シカクイ、セイタカハリイ、トネテンツキ、ヒデリコ、クロテンツキ、ピロードテンツキ、シオカゼテンツキ、ヒメヒラテンツキ、ヤマイ、イソヤマテンツキ、テンツキ、メアゼテンツキ、ヒンジガヤツリ、コイヌノハナヒゲ、カンガレイ、ホタルイ、サンカクイ、フトイ、ノグサ、コマツカサススキ、アブラガヤ
イネ科	シホウチク (シカクダケ)、モウソウチク、ハチク、クロチク、マダケ、ホテイチク、カンザンチク、メダケ、アズマネザサ、ヤダケ、ミヤコザサ、クマザサ、ナリヒラダケ、マコモ、ヤマヌカボ、ハナヌカススキ、コスカグサ、スズメノテッポウ、カラスムギ、カズノコグサ、コバンソウ、ヒメコバンソウ、イヌムギ、スズメノチャヒキ、ヒゲナガスズメノチャヒキ、ヤマアワ、ホッスガヤ、ノガリヤス、カモガヤ、アオカモジグサ、カモジグサ、シラゲガヤ、ハマニンニク、ネズミムギ、クサヨシ、スズメノカタビラ、アオスズメノカタビラ、イチゴツナギ、ヒエガエリ、カニツリグサ、ナギナタガヤ、カゼクサ、ハマガヤ、オニシバ、ナガミノオニシバ、シバ、ヌマガヤ、ツルヨシ、ヨシ、セイタカヨシ、チゴザサ、ササクサ、メリケンカルカヤ、コブナグサ、トダシバ、ジュズダマ、オカルガヤ、メヒシバ、アキメヒシバ、アブラススキ、イヌビエ、ケイヌビエ、ウシノシッペイ、チガヤ、ケカモノハシ、アシボソ、オギ、トキワススキ、ススキ、チヂミザサ、ヌカ

	キビ、キシウスズメノヒエ、シマスズメノヒエ、タチスズメノヒエ、チカラシバ、ワセオバナ、エノコログサ、ムラサキエノコロ、ハマエノコロ、アキノエノコログサ、キンエノコロ、セイバンモロコシ、メカルガヤ
ケシ科	クサノオウ、ナガミヒナグシ、ムラサキケマン
アケビ科	アケビ、ミツバアケビ、ムベ
ツヅラフジ科	アオツヅラフジ
メギ科	メギ、ナンテン、ヒイラギナンテン、ホソバヒイラギナンテン
キンボウゲ科	ツクバトリカブト、ニリンソウ、コミヤマオダマキ、ヒメリュウキンカ、サラシナショウマ、ハンショウヅル、ボタンヅル、センニンソウ、バイカモ、ヒメバイカモ、タガラシ、ケキツネノボタン、キツネノボタン、ヒメウズ、アキカラマツ
ハス科	ハス
スズカケノキ科	スズカケノキ、アメリカスズカケノキ、モミジバズカケノキ
ボタン科	ボタン
マンサク科	ヒュウガミズキ、トサミズキ、イスノキ、トキワマンサク、モミジバフウ
ユズリハ科	ユズリハ、ヒメユズリハ
ユキノシタ科	アカショウマ、チダケサシ、トリアシショウマ、ヤマネコノメソウ、ユキノシタ
ベンケイソウ科	コモチマンネングサ、ツルマンネングサ
タコノアシ科	タコノアシ
アリノトウグサ科	フサモ、オオフサモ
ブドウ科	ノブドウ、エビヅル、サンカクヅル、ツタ、ヤブカラシ
マメ科	ネムノキ、ジャケツイバラ、カワラケツメイ、クサネム、ヤブマメ、ゲンゲ(レンゲ)、ノササゲ(キツネササゲ)、ノアズキ、デイゴ、ツルマメ、フジカンゾウ、ヌスビトハギ、アレチヌスビトハギ、コマツナギ、ヤハズソウ、ハマエンドウ、マルバハギ、ミヤギノハギ、ネコハギ、メドハギ、マキエハギ、ミヤコグサ、ニシキミヤコグサ、ウマゴヤシ、コウマゴヤシ、コメツブウマゴヤシ、ミソナオシ、クズ、タンキリマメ、トキリマメ、ハリエンジュ、ハナアカシア、イタチハギ、クララ、アカツメクサ、シロツメクサ、コメツブツメクサ、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ、クサフジ、ヤブツルアズキ、フジ、ヤマフジ、シロバナヤマフジ
ヒメハギ科	ヒメハギ
グミ科	アキグミ、マルバアキグミ、ツルグミ、ナワシログミ
ニレ科	ケヤキ
アサ科	ムクノキ、エノキ、エゾエノキ
クワ科	カナムグラ、クワクサ、ヤマグワ、コウゾ、ヒメコウゾ、イヌビワ、イタビカズラ、イチジク
イラクサ科	アオミズ、アカソ、コアカソ、クサコアカソ、カラムシ、ナガバヤブマオ、ヤブマオ、ハマヤ

	ブマオ、ウワバミソウ
バラ科	キンミズヒキ、キジムシロ、ミツバツチグリ、ヘビイチゴ、ヤブヘビイチゴ、ダイコンソウ、ワレモコウ、クサボケ、ノイバラ、テリハノイバラ、ハマナス、モッコウバラ、セイヨウバラ、ヤマブキ、ヤエヤマブキ、モミジイチゴ、カジイチゴ、フユイチゴ、ナワシロイチゴ、シモツケ、コデマリ、ユキヤナギ、シジミバナ、コゴメウツギ、マメザクラ、ジュウガツザクラ、シダレザクラ、ヤマザクラ、オオシマザクラ、ソメイヨシノ、ヤエザクラ、カンヒザクラ、ウワミズザクラ、ウメ、コウバイ、スモモ、ヤマナシ、ハナカイドウ、マルバシャリンバイ、クサボケ、ボケ、ビワ、カナメモチ、カマツカ、トキワサンザシ
ブナ科	ミズナラ、コナラ、ナラガシワ、クスギ、ウバメガシ、イチイガシ、ツクバネガシ、アカガシ、シラカシ、アラカシ、スダジイ、クリ、マテバシイ
ヤマモモ科	ヤマモモ
クルミ科	オニグルミ
カバノキ科	ハンノキ、ヤシャブシ、オオバヤシャブシ、イヌシデ
ドクウツギ科	ドクウツギ
ウリ科	アマチャヅル、アレチウリ、カラスウリ、スズメウリ
ニシキギ科	ツルウメモドキ、ツルマサキ、マサキ、カイガクマンサキ、マユミ
カタバミ科	カタバミ、ムラサキカタバミ
ホルトノキ科	ホルトノキ
トウダイグサ科	エノキグサ、コニシキソウ、タカトウダイ、トウダイグサ、ナツトウダイ、ノウルシ、アカメガシワ、ナンキンハゼ、アブラギリ
コミカンソウ科	ヒメミカンソウ
ヤナギ科	タチヤナギ、シロヤナギ、コゴメヤナギ、ウンリュウヤナギ、オノエヤナギ、シバヤナギ、イヌコリヤナギ、ネコヤナギ、カワヤナギ
スマレ科	アリアケスマレ、スマレ、タチツボスマレ、ツボスマレ、ノジスマレ、ヒカゲスマレ
オトギリソウ科	オトギリソウ、コボウズオトギリ、キンシバイ
フウロソウ科	ゲンノショウコ、アメリカフウロ
ミソハギ科	ミソハギ、エゾミソハギ、ホソバヒメミソハギ、サルスベリ、ヒシ
アカバナ科	ミズタマソウ、ミズキンバイ、チョウジタデ、ミズユキノシタ、アカバナユウゲショウ、コマツヨイグサ、マツヨイグサ、オオマツヨイグサ、メマツヨイグサ、アレチマツヨイグサ、ヒルザキツキミソウ
フトモモ科	フェイジョア
ミツバウツギ科	ゴンズイ
キブシ科	キブシ
ウルシ科	ハゼノキ、ツタウルシ、ヌルデ
ムクロジ科	イロハモミジ、ショウジョウ、エンコウカエ

	デ、メグスリノキ、ムクロジ
ミカン科	サンショウ、イスザンショウ、カラスザンショウ、コクサギ
ニガキ科	ニガキ
センダン科	センダン
アオイ科	カラスノゴマ、アオギリ、フヨウ、スイフヨウ、ムクゲ、ウサギアオイ
ジンチョウゲ科	ジンチョウゲ、オニシバリ、ミツマタ
アブラナ科	アブラナ、イヌガラシ、スカシタゴボウ、クレソン、ショカツサイ、タネツケバナ、ナズナ、ハマダイコン、ハマハタザオ、マメグンバイナズナ
ババイヤ科	ババイヤ
ビャクダン科	ツクバネ、ヤドリギ、カナビキソウ
オオバヤドリギ科	オオバヤドリギ
タデ科	イタドリ、イシミカワ、ママコノシリヌグイ、ミヅソバ、ヤマミヅソバ、アキノウナギツカミ、タニソバ、ヒメツルソバ、ミズヒキ、シンミズヒキ、ヒメサクラタデ、シロバナサクラタデ、ヤナギタデ、ボントクタデ、イヌタデ、ハナタデ、オオイヌタデ、サナエタデ、ミチヤナギ、シャクチリソバ、スイバ、ギシギシ、アレチギシギシ
モウセンゴケ科	コモウセンゴケ、モウセンゴケ、ナガバノイシモチソウ
ナデシコ科	ノミノツヅリ、オランダミミナグサ、カワラナデシコ、ハマナデシコ、アメリカナデシコ、ツメクサ、マンテマ、ムシトリナデシコ、ウシハコベ、ハコベ、ノミノフスマ
ヒユ科	イノコヅチ、ホソアオイトゲイトウ、ヒメオオゲイトウ、ホソナガイヌビユ、イヌビユ、ホコガタアカザ、マルバアカザ、カワラアカザ、シロザ、アカザ、ウラジロアカザ、オカヒジキ
スベリヒユ科	スベリヒユ
ハマミズナ科	ツルナ
ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ
オシロイバナ科	オシロイバナ
ザクロソウ科	ザクロソウ
ミズキ科	クルマミズキ、ヤマボウシ、ハナミズキ、ベニバナハナミズキ
アジサイ科	アジサイ、セイヨウアジサイ、ガクアジサイ、タマアジサイ、ウツギ、マルバウツギ
ツリフネソウ科	ツリフネソウ
サガリバナ科	ゴバンノアシ（漂着）
サカキ科	サカキ、ヒサカキ、ハマヒサカキ、モッコク
カキノキ科	ヤマガキ、マメガキ、リュウキュウマメガキ
サクラソウ科	ハマボッス、ミヤマタゴボウ、オカトラノオ、スマトラノオ、コナスビ、ハイハマボッス、ヤブコウジ、マンリョウ、ツルマンリョウ
ツバキ科	ヤブツバキ、オトメツバキ、ベニワビスケ、シロワビスケ、サザンカ、カンツバキ、チャノキ、ナツツバキ
ハイノキ科	クロキ、クロバイ
エゴノキ科	エゴノキ

マタタビ科	サルナシ、キウイフルーツ
ツツジ科	ミツバツツジ、ヤマツツジ、オオムラサキ、アケボノ、シロリュウキュウ、ホンシャクナゲ、セイヨウシャクナゲ、アセビ、ドウダンツツジ、イチヤクソウ、ウメガサソウ、ギンリョウソウ、アキノギンリョウソウ、シャクジョウソウ
アオキ科	アオキ
アカネ科	アリドウシ、ヤエムグラ、ヒメヨツバムグラ、クチナシ、ヒメクチナシ、ツルアリドウシ、ヒロハコンロンカ、フタバムグラ、ヘクソカズラ、アカネ、ハクチョウゲ
リンドウ科	センブリ、リンドウ、コケリンドウ、フデリンドウ
キョウチクトウ科	サカキカズラ、キジョラン、ガガイモ、キョウチクトウ、テイカカズラ、チョウジカズラ、コバノカモメヅル、ツルニチニチソウ
ヒルガオ科	ヒルガオ、コヒルガオ、ハマヒルガオ、ネナシカズラ、ホシアサガオ、マルバルコウソウ
ナス科	ホオズキ、イヌホオズキ、センナリホオズキ、ハダカホオズキ、ヒヨドリジョウゴ、ヤマホロシ、ワルナスビ、クコ
ムラサキ科	スナビキソウ、ホタルカズラ、キュウリグサ、コンフリー
モクセイ科	ヒトツバタゴ、レンギョウ、トネリコ、オウバイ、ネズミモチ、トウネズミモチ、オオバイボタ、イボタノキ、ヒイラギ、キンモクセイ、ギンモクセイ
オオバコ科	サワトウガラシ（アカヌマソウ）、ウンラン、ヘラオオバコ、ツボミオオバコ、オオバコ、トウオオバコ、オオイヌノフグリ、コゴメイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、カワジシャ
ゴマノハグサ科	ピロードモウズイカ
アゼナ科	アゼナ、ウリクサ、シロバナアゼトウガラシ
シソ科	ヤブムラサキ、ムラサキシキブ、イヌムラサキシキブ、コムラサキ、ハマゴウ、ケブカツルカノコソウ、キランソウ、ジュウニヒトエ、ヨウシュジュウニヒトエ、クサギ、ボタンクサギ、タツナミソウ、シロバナタツナミソウ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウ、イヌコウジュ、ヒメジソ、トウバナ、イヌトウバナ、ムシャリンドウ、カキドオシ、コシロネ（ヒメサルダヒコ）、ハッカ、ヤマハッカ、ウツボグサ、キバナアキギリ、アキノタムラソウ、ハナトラノオ
サギゴケ科	サギゴケ、ムラサキサギゴケ
ハエドクソウ科	ハエドクソウ
キリ科	キリ
ハマウツボ科	ナンバンギセル、ゴマクサ、ヤセウツボ、コシオガマ、ヒキヨモギ
タヌキモ科	ホザキノミミカキグサ、ミミカキグサ、イヌタヌキモ
キツネノマゴ科	キツネノマゴ
ノウゼンカズラ科	ノウゼンカズラ
クマツヅラ科	イワダレソウ、クマツヅラ、アレチハナガサ、

	ヤナギハナガサ
モチノキ科	イヌツゲ、ソヨゴ、クロガネモチ、モチノキ
キキョウ科	ツリガネニンジン、ホタルブクロ、ヤマホタルブクロ、キキョウソウ、ツルニンジン(ジイソブ)、ミゾカクシ(アゼムシロ)、キキョウ、ヒナギキョウ
キク科	センボンヤリ、キッコウハグマ、コウヤボウキ、オケラ、ハマアザミ、ノアザミ、ノハラアザミ、セイヨウオニアザミ、キセルアザミ、ナンブアザミ、タイアザミ、キツネアザミ、アズマヤマアザミ、タムラソウ、ハバヤマボクチ、ヤクシソウ、ニガナ、ハナニガナ、ハマニガナ、オオジシバリ、ジシバリ、ノニガナ、アキノノゲシ、オニタビラコ、コオニタビラコ、ヤブタビラコ、ムラサキニガナ、コウゾリナ、ノゲシ、オニノゲシ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポ、カントウタンポポ、トウカイタンポポ、シロバナタンポポ、ベニバナボロギク、ダンドボロギク、ツワブキ、モミジガサ、フキ、ノボロギク、ヤブレガサ、シラヤマギク、ユウガギク、ヨメナ、ヒメシオン、シロヨメナ、ノコンギク、シオン、ゴマナ、アズマギク、ハルジオン、アレチギク、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、ヒメジョオン、セイタカアワダチソウ、アキノキリンソウ、ノコギリソウ、カワラヨモギ、ヨモギ、イソギク、ハナイソギク、ノジギク、リュウノウギク、ハマギク、チチコグサ、タチチチコグサ、チチコグサモドキ、ハハコグサ、ヤブタバコ、サジガンクビソウ、コヤブタバコ、ガンクビソウ、ホソバオグルマ、トキンソウ、コセンダングサ、アメリカセンダングサ、タウコギ、タカサブロウ、ハマグルマ(ネコノシタ)、オオハマグルマ、ハキダメギク、キクイモ、イヌキクイモ、ハルシャギク、オオキンケイギク、ブタクサ、オオブタクサ、イガオナモミ、オオオナモミ、オナモミ、メナモミ、コメナモミ、サワヒヨドリ、ヒヨドリバナ
トベラ科	トベラ
ウコギ科	ウド、ヤマウコギ、タラノキ、カクレミノ、ヤツデ、キツタ、オオバチドメ、チドメグサ、ハリギリ、
セリ科	ウマノミツバ、ノダケ、シシウド、アシタバ、シャク、ミシマサイコ、ハマゼリ、ハマボウフウ、ウイキョウ、ハナウド、イブキボウフウ、セリ、ヤブニンジン、ボタンボウフウ、ヤブジラミ
ガマズミ科	ガマズミ、コバノガマズミ、ゴマギ、ソクズ、サンゴジュ、ニワトコ
スイカズラ科	スイカズラ、ハコネウツギ、ハナゾノツクバネウツギ、オトコエシ、オミナエシ、ツルカノコソウ

シダ植物亜門

ヒカゲノカズラ科	ヒカゲノカズラ、ミズスギ
----------	--------------

イワヒバ科	イワヒバ、クラマゴケ、ヒバゴケ
トクサ科	スギナ、ヒメトクサ、イヌドクサ
ハナヤスリ科	フユノカナワラビ、コヒロハハナヤスリ
ゼンマイ科	ゼンマイ、オニゼンマイ
コケシノブ科	コケシノブ、アオホラゴケ
カニクサ科	カニクサ
ホングウシダ科	ホラシノブ
イノモトソウ科	アイイノモトソウ、イノモトソウ、イワガネソウ、オオバイノモトソウ、キドイノモトソウ、タチシノブ、マツザカシダ、イワガネゼンマイ
コバノイシカグマ科	イヌシダ、ウスゲフモトシダ、コバノイシカグマ、フモトシダ、ワラビ、イワヒメワラビ
チャセンシダ科	イヌチャセンシダ、トラノオシダ
イワデンダ科	イヌワラビ、シロヤマシダ、ノコギリシダ、ヤマイヌワラビ、シケシダ
シシガシラ科	オオカグマ、コモチシダ、ハチジョウカグマ、シシガシラ、ヒリュウシダ
メシダ科	シケシダ、セイタカシケシダ、ヘビノネコザ、ヘラシダ、ホソバシケシダ
ヒメシダ科	イヌケホシダ、ゲジゲジシダ、コウモリシダ、ハシゴシダ、ハリガネワラビ、ヒメシダ、ミゾシダ、ミドリヒメワラビ、ハシゴシダ、コハシゴシダ
オシダ科	アイアスカイノデ、アスカイノデ、イノデ、オシダ、キヨタキシダ、クサソテツ、ジュウモンジシダ、タカサゴシダ、ツルデンド、ナチクジャク、オオベニシダ、ベニシダ、ハチジョウベニシダ、ホソバナライシダ、ホソバカナワラビ、オニヤブソテツ、ヤブソテツ、ナガバヤブソテツ、リュウモンシダ、オオイタチシダ、オオカナワラビ、ヒメカナワラビ(キヨスミシダ)、オクマワラビ、カツモウイノデ、オリヅルシダ、トウゴクシダ、ミサキカグマ
シノブ科	シノブ、トキワシノブ、タチシノブ
ウラボシ科	イワヤナギシダ、ウラボシ、クリハラン、ノキシノブ、ミヤマノキシノブ、ヤノネシダ、ミツデウラボシ

ゼニゴケ植物門

ゼニゴケ科	アズマゼニゴケ、ジャゴケ、ゼニゴケ、ミカヅキゼニゴケ、ヤワラゼニゴケ
アズマゼニゴケ科	ケゼニゴケ
ウロコゴケ科	ツクシウロコゴケ、ヒメトサカゴケ
ケビラゴケ科	ヤマトケビラゴケ
ヤスデゴケ科	カラヤスデゴケ
クサリゴケ科	ヤマトコミミゴケ
ムチゴケ科	ムチゴケ
ツクスギゴケ科	トサホラゴケモドキ

マゴケ植物門

ミズゴケ科	ミズゴケ
スギゴケ科	ウマスギゴケ、スギゴケ、コスギゴケ、タチゴケ
ホウオウゴケ科	ホウオウゴケ

シラガゴケ科	ホソバオキナゴケ
センボンゴケ科	ハマキゴケ
ギボウシゴケ科	スナゴケ
マゴケ科	マゴケ
ハリガネゴケ科	カサゴケ、ギンゴケ
チョウチンゴケ科	コツボゴケ、コバノチョウチンゴケ、ツルチ ョウチンゴケ
ヒノキゴケ科	ヒノキゴケ
ハイヒモゴケ科	キヨスミイトゴケ
クジャクゴケ科	クジャクゴケ
アオギヌゴケ科	ハネヒツジゴケ
ハイゴケ科	ハイゴケ、キャラバゴケ

ツノゴケ植物門

ツノゴケ科	ツノゴケ
-------	------

菌界

子囊菌門・地衣類

ウメノキゴケ科	ウメノキゴケ、ナミガタウメノキゴケ、ハイ イロウメノキゴケ、コナウチキウメノキゴケ、 コフキチョロギウメノキゴケ、トゲウメノキ ゴケ、ヒカゲウチキウメノキゴケ、クズレウ チキウメノキゴケ、シラチャウメノキゴケ、 キウメノキゴケ、タナカウメノキゴケ、クズ レマツゲゴケ、マツゲゴケ、オオチヂレマツ ゲゴケ、ウラグロマツゲゴケ、オオマツゲゴ ケ、トコブシゴケ、ゴンゲンゴケ、コウヤゴン ゲンゴケ、サルオガセ、ツブコナサルオガセ、 ツノマタゴケ、ヒメウメノキゴケ、コナヒメ ウメノキゴケ、センシゴケ、ハクテンゴケ、ト ゲハクテンゴケ、コフキカラタチゴケ
ハナゴケ科	ジョウゴゴケ、ヒメジョウゴゴケ、ヤグラゴ ケ、ヒメヤグラゴケ、ササクレマタゴケ、ヒメ レンゲタケ、コナアカミゴケ
カワラゴケ科	カワラゴケ、コナカワラゴケ
ツメゴケ科	ナガネツメゴケ、ヒロハツメゴケ、ウスバイ ヌツメゴケ
センニンゴケ科	ヘラゴケ、ヒメカイガラゴケ、フトネゴケ、ヘ リプトゴケ、ヤスダゴケ、キクバチャシブゴ ケ、アオチャゴケ、アカヒゲゴケモドキ、イズ カワホリゴケ、ウスイロマツゲゴケ、ウスチ ャサクラゴケ、キクバゴケ、コザライワノリ
ピンゴケ科	コフキジリナリア
スライカビ科	イバリスライカビ
アナイボゴケ科	マユゴケ、ノルマンゴケ

担子菌門

キシメジ科	ホンシメジ、エノキタケ、オオキツネタケ、オ シロイシメジ、キシメジ、コムラサキシメジ、 ドクササコ、ネズミシメジ、ムラサキシメジ、 シイタケ、カキシメジ、クロゲジシメジ、クマ シメジ、ハマシメジ、コザラミノシメジ、シモ コシ
ベニタケ科	カワリハツ、クサハツ、シロハツ、チチタケ、 ツチカブリ、ドクベニタケ、ハイイロカラチ チタケ、ハツタケ、ベニタケ、クロハツ、アカ

	ハツ、キチャハツ、コシノムラサキハツ
イッボンシメジ 科	ウラベニホテイシメジ、クサウラベニタケ、 ハルシメジ
テングタケ科	ガンタケ、コテングタケ、コテングタケモド キ、タマゴタケ、タマシロオニタケ、ツルタ ケ、テングタケ、ドクツルタケ
ヌメリイグチ科	ヌメリイグチ、アマタケ、アミハナイグチ、ハ ナイグチ、チチアワタケ
イグチ科	コショウイグチ
ウラベニガサ科	ベニヒダタケ
オウギタケ科	オウギタケ、クギタケ
クヌギタケ科	サクラタケ
シロソウメンタケ科	カベントケ
タマバリタケ科	ツエタケ、ヌメリツバタケ、マツカサキノコ モドキ
ツキヨタケ科	エセオリミキ
ヒドナンギウム科	ウラムラサキ
ヒラタケ科	ヒラタケ、キヒラタケ
ヌメリガサ科	サクラシメジ
ナヨタケ科	ヒトヨタケ
モエギタケ科	ニガグリタケ、ツバナシフミヅキタケ
ショウロ科	ショウロ
ハラタケ科	ホコリタケ(キツネノチャブクロ)、コゲホコ リタケ、タヌキノチャブクロ、ノウタケ、ウス キモリノカサ、ザラエノハラタケ
フウセンタケ科	ササタケ、ニセマツカサシメジ
ホウライタケ科	スジオチバタケ
マツカサタケ科	マツカサタケ
ツチグリ科	ツチグリ
マツバハリタケ科	マツバハリタケ
ホウキタケ科	ホウキタケ、ハナホウキタケ
カノシタ科	カノシタ
ハナビラタケ科	ハナビラニカワタケ
キクラゲ科	キクラゲ、アラゲキクラゲ
シロキクラゲ科	シロキクラゲ、ニカワハリタケ
アミガサタケ科	アミガサタケ
ツチクラゲ科	ツチクラゲ
ピロネマキン科	キンチャワಂತケ
ベニチャワಂತケ科	ベニチャワಂತケ
スッポンタケ科	キヌガサタケ、スッポンタケ、コナガエノア カカゴタケ
アカカゴタケ科	カニノツメ
ヒメツチグリ科	エリマキツチグリ、ヒナツチガキ
タマチョレイタ ケ科	カワラタケ、シハイタケ、オオシワタケ、アオ ゾメタケ、ウチワタケ、ワヒダタケ

原生生物界

緑藻(緑藻植物門・緑藻綱)

アオサ科	アナアオサ、ナガアオサ、ボタンアオサ、スジ アオノリ、ボウアオノリ
アオモグサ科	アオモグサ
ミル科	ミル

褐藻(オクロ植物門・褐藻綱)

ネバリモ科	ネバリモ
マツモ科	イワヒゲ
アミジグサ科	ヤハズグサ
カヤモノリ科	フクロノリ
コンブ科	アラメ、カジメ
ホンダワラ科	オオバモク、ノコギリモク、ヒジキ、ホンダワラ、ラップモク

紅藻植物門

ウシケノリ科	スサビノリ
ベニモヅク科	カモガシラノリ
ガラガラ科	ジュズガラガラ
テングサ科	オオブサ、ヒラクサ
ナミノハナ科	ナミノハナ
サンゴモ科	ウスカワカニノテ、ヒライボ
カクレイト科	キントキ、タンバノリ
フノリ科	ハナフノリ
カレキグサ科	カレキグサ
ツカサノリ科	ヒロハノトサカモドキ、ホソバノトサカモドキ
スメリグサ科	ホウノオ
ミリン科	トサカノリ
ユカリ科	ユカリ
イバラノリ科	カギイバラノリ
オゴノリ科	カバノリ、シラモ
スギノリ科	イボツノマタ、トゲツノマタ
ダルス科	マサゴシバリ
イギス科	アミクサ、ウブゲグサ、エゴノリ
コノハノリ科	ハスジギヌ、ハブタエノリ、ヤレウスバノリ
ダジア科	イソハギ
フジマツモ科	ケハネグサ

動物界

脊椎動物（脊索動物門・脊椎動物亜門）

哺乳綱

オナガザル科	ニホンザル
ウサギ科	ノウサギ
リス科	ニホンリス
ネズミ科	アカネズミ、ヒメネズミ、カヤネズミ
モグラ科	アズマモグラ、ヒミズ
キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ
ヒナコウモリ科	ユビナガコウモリ、アブラコウモリ
イノシシ科	イノシシ
シカ科	ニホンジカ、キョン
ネズミイルカ科	スナメリ
マイルカ科	マイルカ、マゴンドウ、カワゴンドウ
マッコウクジラ科	マッコウクジラ
コマッコウ科	コマッコウ
イヌ科	タヌキ
アライグマ科	アライグマ
イタチ科	イタチ、ニホンアナグマ
ジャコウネコ科	ハクビシン
アシカ科	オットセイ

鳥綱

カモ科	コクガン、オオハクチョウ、コハクチョウ、オシドリ、トモエガモ、シマアジ、ハシビロガモ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、オナガガモ、スズガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、シノリガモ、アラナミキンクロ、ピロードキンクロ、クロガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ウミアイサ
キジ科	ヤマドリ、キジ、ウズラ、コジュケイ
アマツバメ科	アマツバメ
カッコウ科	ホトトギス
ハト科	キジバト、カワラバト、アオバト
クイナ科	クイナ、バン、オオバン、シマクイナ、ヒクイナ
カイツブリ科	カイツブリ、カンムリカイツブリ、アカエリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ
ミヤコドリ科	ミヤコドリ
セイタカシギ科	セイタカシギ、ソリハシセイタカシギ
チドリ科	タグリ、ケリ、ムナグロ、ダイゼン、ハジロコチドリ、イカルチドリ、コチドリ、シロチドリ、オオメダイチドリ、メダイチドリ、コバシチドリ
タマシギ科	タマシギ
シギ科	チュウシヤクシギ、コシヤクシギ、ホウロクシギ、ダイシヤクシギ、オオソリハシシギ、オグロシギ、キョウジョシギ、オバシギ、コオバシギ、エリマキシギ、キリアイ、ウズラシギ、サルハマシギ、オジロトウネン、ヒバリシギ、ヘラシギ、トウネン、ミユビシギ、ハマシギ、ヒメウズラシギ、コシジロウズラシギ、コモンシギ、アメリカウズラシギ、ヒメハマシギ、オオハシシギ、オオジシギ、チュウジシギ、タシギ、ソリハシシギ、アカエリヒレハシシギ、ハイロヒレハシシギ、イソシギ、クサシギ、メリケンキアシシギ、キアシシギ、アカアシシギ、コアシシギ、タカアシシギ、ツルシギ、アオアシシギ、カラフトアオアシシギ
カモメ科	ユリカモメ、ズグロカモメ、ウミネコ、カモメ、シロカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ハシブトアジサシ、コアジサシ、エリグロアジサシ、アジサシ、ハジロクロハラアジサシ、オオトウゾクカモメ、トウゾクカモメ、クロトウゾクカモメ
ウミスズメ科	マダラウミスズメ、ウミスズメ、エトロフウミスズメ
アビ科	アビ、オオハム、シロエリオオハム、ハシジロアビ
アホウドリ科	コアホウドリ
ミズナギドリ科	フルマカモメ、オオミズナギドリ、ハイロミズナギドリ、ハシボソミズナギドリ、アカアシミズナギドリ
コウノトリ科	コウノトリ

グンカンドリ科	オオグンカンドリ、コグンカンドリ
ウ科	ヒメウ、カワウ、ウミウ
トキ科	クロツラヘラサギ
サギ科	ヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、アマサギ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、クロサギ、カラシラサギ
ミサゴ科	ミサゴ
タカ科	ハチクマ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、チュウヒ、ハイイロチュウヒ、トビ、オジロワシ、サシバ、ノスリ
フクロウ科	アオバズク、トラフズク、フクロウ
カワセミ科	カワセミ、アカショウビン
キツツキ科	アリスイ、コゲラ
ハヤブサ科	ハヤブサ、チョウゲンボウ
カササギビタキ科	サンコウチョウ
モズ科	モズ
カラス科	ハシボソガラス、ハシブトガラス、カケス、オナガ
シジュウカラ科	ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ
ヒバリ科	ヒバリ、ヒメコウテンシ、コヒバリ
ヒヨドリ科	ヒヨドリ
ツバメ科	ショウドウツバメ、ツバメ、イワツバメ、コシアカツバメ
ウグイス科	ウグイス、ヤブサメ
エナガ科	エナガ
ムシクイ科	センダイムシクイ、エゾムシクイ
ヨシキリ科	オオヨシキリ、コヨシキリ
センニュウ科	エゾセンニュウ、オオセッカ
セッカ科	セッカ
メジロ科	メジロ
クキイタダキ科	クキイタダキ
ミソサザイ科	ミソサザイ
ムクドリ科	ムクドリ、コムクドリ
ツグミ科	トラツグミ、ツグミ、クロツグミ、アカハラ、シロハラ
ヒタキ科	オオトリ、コマドリ、ノゴマ、キビタキ、ルリビタキ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、ノビタキ
スズメ科	スズメ
セキレイ科	ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイ、ビンズイ、ムネアカタヒバリ、タヒバリ
アトリ科	アトリ、シメ、ウソ、カワラヒワ、ベニヒワ、マヒワ
ホオジロ科	ホオジロ、オオジュリン、ホオアカ、カシラダカ、アオジ

爬虫綱

コブラ科	セグロウミヘビ
クサリヘビ科	ニホンマムシ
ナミヘビ科	ヤマカガシ、ヒバカリ、アオダイショウ、シマヘビ、ジムグリ
カナヘビ科	ニホンカナヘビ
トカゲ科	ヒガシニホントカゲ
ヤモリ科	ニホンヤモリ

イシガメ科	クサガメ、イシガメ、ハナガメ
カミツキガメ科	フロリダカミツキガメ、ワニガメ
ヌマガメ科	ミシシッピアカミミガメ
ウミガメ科	アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ
オサガメ科	オサガメ

両生綱

サンショウウオ科	トウキョウサンショウウオ
アオガエル科	シュレーゲルアオガエル、ニホンアマガエル
アカガエル科	ヤマアカガエル、ニホンアカガエル、ウシガエル、トウキョウダルマガエル
ヒキガエル科	アズマヒキガエル

軟骨魚綱

ネコザメ科	ネコザメ
トラザメ科	ナヌカザメ
ドチザメ科	ホシザメ、ドチザメ
メジロザメ科	メジロザメ
シュモクザメ科	アカシュモクザメ
カスザメ科	カスザメ
ガンギエイ科	ガンギエイ
アカエイ科	アカエイ
トビエイ科	トビエイ、ヒラタエイ
ウチワザメ科	ウチワザメ

硬骨魚綱

ニシン科	ウルメイワシ、マイワシ、コノシロ
カタクチイワシ科	カタクチイワシ
ウナギ科	ニホンウナギ
アナゴ科	マアナゴ、クロアナゴ
ハモ科	スズハモ
アユ科	アユ
サケ科	シロザケ
コイ科	ヤリタナゴ、ミヤコタナゴ、マルタ、モツゴ、ハクレン、コイ、ギンブナ
ドジョウ科	ドジョウ、ヒガシシマドジョウ、ホトケドジョウ
ナマズ科	ナマズ
ゴンズイ科	ゴンズイ
ミズウオ科	ミズウオ
メダカ科	ミナミメダカ
サヨリ科	サヨリ
トビウオ科	トビウオ（ホントビ）
ヨウジウオ科	タカラタツ
イトウダイ科	イトウダイ
マツカサウオ科	マツカサウオ
マトウダイ科	マトウダイ
ボラ科	ボラ
ツバメコノシロ科	ツバメコノシロ
カマス科	ヤマトカマス
スズキ科	スズキ
キントキダイ科	チカメキントキ
クロマス科	ブルーギル、オオクチバス
キス科	シロギス
スギ科	スギ

イボダイ科	イボダイ
アジ科	ブリ、マアジ、ギンガメアジ、オニヒラアジ、ロウニンアジ、シマアジ、イトヒキアジ
ヒイラギ科	ヒイラギ
ニベ科	ニベ（イシモチ）
メジナ科	メジナ
イサキ科	ヒゲダイ、イサキ、コショウダイ
シマイサキ科	シマイサキ、コトヒキ
タイ科	マダイ、クロダイ、ハナダイ、キチヌ（キビレ）
カゴカキダイ科	カゴカキダイ
イシダイ科	イシダイ、イシガキダイ
デンジクダイ科	オオスジイシモチ
タカノハダイ科	タカノハダイ、ミギマキ
スズメダイ科	スズメダイ
ペラ科	キュウセン
ブダイ科	ブダイ
チョウチョウウオ科	キンチャクダイ、シラコダイ
サバ科	マサバ
タチウオ科	タチウオ
イソギンボ科	イソギンボ
タウエガジ科	ナガズカ
カワアナゴ科	カワアナゴ
ハゼ科	マハゼ、アシジロハゼ、ヨシノボリ、トウヨシノボリ、ピリンゴ、アベハゼ、チチブ、スマチチブ、シマハゼ、シモフリシマハゼ、アカオビシマハゼ、ウロハゼ、ミミズハゼ、アゴハゼ、ツマグロスジハゼ、ヒメハゼ、ボウズハゼ
カサゴ科	メバル、カサゴ、イソカサゴ、フサカサゴ
アイナメ科	アイナメ、エゾアイナメ
コチ科	メゴチ
セミホウボウ科	セミホウボウ
ダンゴウオ科	ホテウオ
クサウオ科	エゾクサウオ
コバンザメ科	ナガコバン
ヒラメ科	ヒラメ、ガンゾウヒラメ
カレイ科	スマガレイ、イシガレイ、メイトガレイ
ウシノシタ科	クロウシノシタ、アカシタヒラメ
ササウシノシタ科	ツノウシノシタ、シマウシノシタ
ギマ科	ギマ
カワハギ科	カワハギ、ウマヅラハギ
ハコフグ科	ハコフグ、ウミスズメ
フグ科	クサフグ、ショウサイフグ、アカメフグ（ヒガンフグ）、サバフグ、キタマクラ
ハリセンボン科	ハリセンボン
マンボウ科	マンボウ

無脊椎動物・海綿動物門

イソカイメン科	ナミイソカイメン、ダイダイイソカイメン、ザラカイメン
パンカイメン科	オオパンカイメン
タマカイメン科	ユズダマカイメン
カワナシカイメン科	ムラサキカイメン

刺胞動物門

ウメボシイソギンチャク科	ウメボシイソギンチャク、ヨロイイソギンチャク
タテジマイソギンチャク科	タテジマイソギンチャク
クビカザリイソギンチャク科	ベニヒモイソギンチャク
サザナミサンゴ科	キクメイシ
キサンゴ科	キサンゴ
ウミサボテン科	ウミサボテン
オキクラゲ科	アカクラゲ
ミズクラゲ科	ミズクラゲ
ヒゼンクラゲ科	ヒゼンクラゲ、エチゼンクラゲ
ウミヒドラ科	ウミヒドラ、イガグリガイ
ハネガヤ科	シロガヤ、クロガヤ、ドングリガヤ、ウミヒノキ
ギンカクラゲ科	ギンカクラゲ、カツオノカンムリ
カツオノエボシ科	カツオノエボシ

紐型動物門

リネウス科	ミサキヒモムシ
-------	---------

環形動物門

イソメ科	イソメ
ギボシイソメ科	ギボシイソメ
イトゴカイ科	イトゴカイ
フサゴカイ科	フサゴカイ
ミズヒキゴカイ科	ミズヒキゴカイ
スビオ科	スビオ
ケヤリムシ科	ケヤリ
カンザシゴカイ科	ヤッコカンザシ、エゾカサネカンザシ
ウズマキゴカイ科	ウズマキゴカイ
ゴカイ科	ゴカイ、イトメ
チロリ科	チロリ
ウロコムシ科	マダラウロコムシ
ウミケムシ科	ウミケムシ
ミミズ科	ミミズ

節足動物門

星形動物門

ウミグモ科	ウミグモ
クモヒトデ科	クモヒトデ
テヅルモヅル科	テヅルモヅル

甲殻動物門

ミズヒキガニ科	サナダミズヒキガニ
ヘイケガニ科	サメハダヘイケガニ
キンセンガニ科	キンセンガニ
クモガニ科	カイメンガニ
コブシガニ科	ヒラコブシ、タマコブシガニ
クモガニ科	ヨツハモガニ、ニッポンモガニ、イソクズガニ、イッカククモガニ、ケアシガニ、ノコギリガニ
ヒシガニ科	ヒシガニ
イチョウガニ科	イチョウガニ、イボイチョウガニ

ワタリガニ科	ガザミ、ジャノメガザミ、カルバガザミ、ノコギリガザミ、ヒラツメガニ、ベニツケガニ、イシガニ
オウギガニ科	ヒメオウギガニ、サガミヒメオウギガニ、マツバガニ、ヘリトリマンジュウガニ
スナガニ科	スナガニ、チゴガニ、コメツキガニ、アリアケモドキ、オサガニ、ヤマトオサガニ、オヨギビンノ
モクズガニ科	イワガニ、オキナガレガニ、モクズガニ、イソガニ、ヒライソガニ、ケフサイソガニ、アシハラガニ、ショウジンガニ、トリウミアカイソモドキ
ベンケイガニ科	ベンケイガニ、クロベンケイガニ、アカテガニ、フタバカクガニ
サワガニ科	サワガニ
ホンヤドカリ科	ベニホンヤドカリ、アカボシヤドカリ、オニヤドカリ、トゲツノヤドカリ
スナホリガニ科	ハマスナホリガニ
タラバガニ科	イガグリガニ
クダヒゲガニ科	フシメクダヒゲガニ
スナモグリ科	ニホンスナモグリ
アナジャコ科	アナジャコ、ヨコヤアナジャコ
アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ
イセエビ科	イセエビ
エビジャコ科	エビジャコ
カイカムリ科	カイカムリ
カニダマシ科	コブカニダマシ、オオアカハラ
クルマエビ科	クルマエビ、クマエビ
コシオリエビ科	コシオリエビ
セミエビ科	セミエビ、ゾウリエビ
テナガエビ科	スジエビ、スジエビモドキ、テナガエビ
ヌマエビ科	ヌマエビ
イワフジツボ科	イワフジツボ
エボシガイ科	エボシガイ、カルエボシ
カメフジツボ科	カメフジツボ
クロフジツボ科	クロフジツボ
ハダカエボシ科	ハダカエボシ
フジツボ科	アカフジツボ、アメリカフジツボ、オオアカフジツボ、サンカクフジツボ、シロスジフジツボ
ミョウガガイ科	カメノテ
ムカシフジツボ科	チシマフジツボ
アミ科	シキシマフクロアミ
カラヌス科	バシヒカ
シャコ科	シャコ
ドロクダムシ科	ドロクダムシ
ハマトビムシ科	ヒメハマトビムシ
エンボソコエビ科	ドロソコエビ
ヨコエビ科	ヨコエビ
ワレカラ科	ワレカラ、クビナガワレカラ
ウオノエ科	イワシノコバン
ウミナナフシ科	ムロミスウミナナフシ
スナホリムシ科	ヒガタスナホリムシ、ヒメスナホリムシ
フナムシ科	フナムシ

ヘラムシ科	ワラジヘラムシ
ワラジムシ科	ワラジムシ

鋏角亜門

ジグモ科	ジグモ
タナグモ科	クサグモ
キシダグモ科	イオウイロハシリグモ
ヒメグモ科	オナガグモ
アシナガグモ科	オオシロカネグモ、コシロカネグモ、アシナガグモ
ジョロウグモ科	ジョロウグモ
コガネグモ科	オニグモ、ヤマオニグモ、サツマノミダマシ、ヤマシロオニグモ、コガネグモ、ナガコガネグモ、ゴミグモ、スズミグモ
アシダカグモ科	アシダカグモ
カニグモ科	ハナグモ
ハエトリグモ科	ネコハエトリ、ミスジハエトリ、アリグモ
ヤドリカニムシ科	オオヤドリカニムシ

多足亜門

シロハダヤスデ科	マクラギヤスデ
ナガズジムカデ科	ニホンナガズジムカデ
オオムカデ科	トビズムカデ
ゲジ科	カマクラオオゲジ

六脚亜門・昆虫綱

イシノミ科	ヤマトイシノミ
モンカゲロウ科	モンカゲロウ
ヘビトンボ科	ヤマトクロスジヘビトンボ
トンボ科	シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、シオヤトンボ、コシアキトンボ、ショウジョウトンボ、ハラビロトンボ、ウスバキトンボ、チョウトンボ、コフキトンボ、アキアカネ、ナツアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボ、マユタテアカネ、マイコアカネ、ヒメアカネ
ヤマトトンボ科	オオヤマトンボ
ヤンマ科	ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、サラサヤンマ、カトリヤンマ、コシボソヤンマ
オニヤンマ科	オニヤンマ
サナエトンボ科	ヤマサナエ、オジロサナエ、コオニヤンマ、ウチワヤンマ
カワトンボ科	ハグロトンボ、カワトンボ
イトトンボ科	アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、クロイトトンボ、セスジイトトンボ、オオイトトンボ、キイトトンボ
アオイトトンボ科	アオイトトンボ、オオアオイトトンボ、ホソミオツネイトンボ
オオゴキブリ科	オオゴキブリ
カマキリ科	オオカマキリ、チョウセンカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリ
キリギリス科	ツユムシ、クツワムシ、クビキリギリス、クサキリ、ハヤシノウマオイ
バッタ科	ハネナガイナゴ、ショウリョウバッタモドキ
マツムシ科	マツムシ
ナナフシ科	ナナフシ、トゲナナフシ

セミ科	アブラゼミ、ツクツクボウシ、ニイニイゼミ、ヒグラシ、ミンミンゼミ
カメムシ科	アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、イネカメムシ、クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ、ヨコヅナサシガメ
キンカメムシ科	アカスジキンカメムシ、オオキンカメムシ
ツノカメムシ科	エサキモンキツノカメムシ、セアカツノカメムシ
ヘリカメムシ科	オオクモヘリカメムシ
サシガメ科	オオトビサシガメ
ツノゼミ科	ツノゼミ
ミミズク科	ミミズク
アワフキムシ科	マツアワフキ
アメンボ科	アメンボ、オオアメンボ
コオイムシ科	コオイムシ
マツモムシ科	マツモムシ
ミズムシ科	ホッケミズムシ
タイコウチ科	タイコウチ
ウスバカゲロウ科	ウスバカゲロウ
ツノトンボ科	ツノトンボ
ミズスマシ科	ミズスマシ、オオミズスマシ
ゲンゴロウ科	コシマゲンゴロウ、ハイイロゲンゴロウ、マルガタノゲンゴロウ、ヒメゲンゴロウ
オサムシ科	コニワハンミョウ、ニワハンミョウ、トウキョウヒメハンミョウ、クロカタビロオサムシ、マイマイカブリ、アオオサムシ、コヒラタゴミムシ、ヒョウタンゴミムシ、ヒメヒョウタンゴミムシ、ミイデラゴミムシ、アオゴミムシ、キボシアオゴミムシ、ヒメキベリアオゴミムシ、ツヤキベリアオゴミムシ、オオイクビツヤゴモクムシ、クロモリヒラタゴミムシ、アオヘリゴミムシ、ヤホシアトキリゴミムシ、アオアトキリゴミムシ、アトモンミズギワゴミムシ、ノグチナガゴミムシ
タマムシ科	ウバタマムシ、ヤマトタマムシ
コメツキムシ科	サビキコリ、アカアシオオクシコメツキ、シモフリコメツキ、クロツヤハダコメツキ、オオツヤハダコメツキ
ベニボタル科	カクムネベニボタル、クシヒゲベニボタル、ユアサクロベニボタル
ホタル科	クロマドボタル、オバボタル、ヘイケボタル、ゲンジボタル、カタモンミナミボタル
ジョウカイボン科	ムネアカクロジョウカイ、クロジョウカイ、ジョウカイボン、マルムネジョウカイボン、アオジョウカイ
ガムシ科	ガムシ
クワガタムシ科	コクワガタ、ミヤマクワガタ、オニクワガタ、ノコギリクワガタ
センチコガネ科	オオセンチコガネ、センチコガネ
コガネムシ科	コブマルエンマコガネ、ヒメアシナガコガネ、アシナガコガネ、ナガチャコガネ、オオコフキコガネ、コフキコガネ、シロスジコガネ、ピロウドコガネ、コイチャコガネ、アオドウガネ、ドウガネブイブイ、サクラコガネ、ヒメコガネ、セマダラコガネ、コガネムシ、キスジコ

	ガネ、マメコガネ、カブトムシ、ナミハナムグリ、アオハナムグリ、コアオハナムグリ、クロハナムグリ、シロテンハナムグリ、カナブン、アオカナブン、ヒメトラハナムグリ、ヒラタハナムグリ
シデムシ科	ヨツボシモンシデムシ、オオヒラタシデムシ、ベッコウヒラタシデムシ
ハネカクシ科	メダカハネカクシ、アカバハネカクシ
カミキリモドキ科	ミヤマカミキリモドキ、キバネカミキリモドキ、モモブトカミキリモドキ
アカハネムシ科	アカハネムシ
ツチハンミョウ科	ヒメツチハンミョウ、オオツチハンミョウ
ゴミムシダマシ科	ニホンキマワリ
テントウムシ科	ナナホシテントウ、マクガタテントウ、ナミテントウ、ダンドラテントウ
オオクスイムシ科	ヨツボシオオクスイ
ケシクスイムシ科	ヨツボシケシクスイ
ヒゲナガゾウムシ科	キマダラヒゲナガゾウムシ
オトシブミ科	ヒメクロオトシブミ、ウスモンオトシブミ、ハイイロチョッキリ、シロテンチョッキリ
オサゾウムシ科	オオゾウムシ、ヤサイゾウムシ、トホシオサゾウムシ
ゾウムシ科	クスギシギゾウムシ、ヒメシロコブゾウムシ、シロコブゾウムシ、ハスジカツオゾウムシ、フトアナアキゾウムシ、オジロアシナガゾウムシ
ホソカミキリ科	ホソカミキリ
カミキリムシ科	ノコギリカミキリ、アオスジカミキリ、チビハナカミキリ、ルリハナカミキリ、ヨスジハナカミキリ、ヘリウスハナカミキリ、アカハナカミキリ、モモグロハナカミキリ、フタコブルリハナカミキリ、クロカミキリ、ミドリカミキリ、トビヒゲトラカミキリ、キマダラミヤマカミキリ、ホソトラカミキリ、ヤノトラカミキリ、トビイロカミキリ、ベニカミキリ、クワカミキリ、シロスジカミキリ、ホシベニカミキリ、ナガゴマフカミキリ、ゴマダラカミキリ、マツノマダラカミキリ、ヒメヒゲナガカミキリ、キボシカミキリ、ヘリグロリンゴカミキリ、ハイイロヤハズカミキリ、シラホシカミキリ、ラミーカミキリ、タテジマカミキリ、キイロカミキリムシ
ハムシ科	キイロクビナガハムシ、アカクビナガハムシ、ジンガサハムシ、ナミカメノコハムシ、セモンジンガサハムシ、コガタリハムシ、ムナグロツヤハムシ、オオキイロマルノミハムシ、オオアカマルノミハムシ、ヒロアシタマノミハムシ、チャバネツヤハムシ、イタドリハムシ、イチモンジハムシ、クロウリハムシ、クワハムシ、キバネニセハムシ
オオハサミムシ科	オオハサミムシ
ミツバチ科	ニホンミツバチ、セイヨウミツバチ、クマバチ、トラマルハナバチ
コシブトハナバチ科	シロスジヒゲナガハナバチ
スズメバチ科	オオスズメバチ、モンズメバチ

ハバチ科	シモツケマルハバチ
ヒメバチ科	イヨヒメバチ
ジガバチ科	アメリカジガバチ
クモバチ科	トゲアシオオクモバチ
ドロバチ科	オオカバフスジドロバチ
シリアゲムシ科	ヤマトシリアゲ
ハナアブ科	ナミヒラタアブ、ホソヒラタアブ、ヨコジマオオヒラタアブ、
ハエ科	ツマグロキンバエ
チョウバエ科	オオチョウバエ
エグリトビケラ科	ホタルトビケラ
シロチョウ科	モンシロチョウ、スジグロシロチョウ、モンキチョウ、キタキチョウ、ツマキチョウ
アゲハチョウ科	ナミアゲハ、キアゲハ、ジャコウアゲハ、ナガサキアゲハ、カラスアゲハ、アオスジアゲハ、クロアゲハ、オナガアゲハ、モンキアゲハ
タテハチョウ科	アカタテハ、ヒメアカタテハ、キタテハ、ルリタテハ、イチモンジチョウ、アサマイチモンジ、ツマグロヒョウモン、ミドリヒョウモン、アサギマダラ、コムラサキ、ゴマダラチョウ、アカボシゴマダラ、テングチョウ、コムスジ、ミスジチョウ、クロコノマチョウ、サトキマダラヒカゲ、ヤマキマダラヒカゲ、ヒメキマダラヒカゲ、ナミヒカゲ、ヒメウラナミジャンメ、ヒメジャンメ、コジャンメ
シジミチョウ科	ベニシジミ、ルリシジミ、ヤマトシジミ、ウラギンシジミ、ムラサキシジミ、ムラサキツバメ、アカシジミ、ミドリシジミ、ゴイシジミ、ウラナミシジミ、ツバメシジミ
セセリチョウ科	ダイミョウセセリ、キマダラセセリ、ヒメキマダラセセリ、コチャバネセセリ、チャバネセセリ、イチモンジセセリ、オオチャバネセセリ、ギンイチモンジセセリ
イカリモンガ科	イカリモンガ
マドガ科	マドガ
スズメガ科	オオスカシバ、ホシホウジャク、ヒメクロホウジャク、セスジスズメ、ベニスズメ、モモスズメ、コスズメ
シャクガ科	シロオビクロナミシャク、アトボシエダシャク、キマダラオオナミシャク、トンボエダシャク、ヒロオビトンボエダシャク
シャチホコガ科	セダカシャチホコ
ハゴロモ科	スケバハゴロモ
アオバハゴロモ科	アオバハゴロモ
イラガ科	ヒメクロイラガ
スカシバガ科	ブドウスカシバ
ハマキガ科	ピロードハマキ
ヤママユガ科	オオミズアオ
ヤガ科	オスグロトモエ、アケビコノハ、フクラスズメ、ハマオモトヨトウ
マダラガ科	ホタルガ
ツトガ科	シロオビノメイガ、ヨツボシノメイガ、シロモンノメイガ
ヒトリガ科	ゴマダラベニコケガ、カノコガ

軟体動物門

クサズリガイ科	ヒザラガイ
ケハダヒザラガイ科	ケハダヒザラガイ
ケムシヒザラガイ科	ケムシヒザラガイ
イガイ科	ムラサキイガイ、イシマテ、マユイガイ、ムラサキインコ、クジャクガイ、ヒメイガイ、コウロエンカワヒバリガイ、タマエガイ、ヒバリガイ、ハンレイヒバリガイ、ホトトギスガイ
ハボウキガイ科	タイラギ
ナミマガシワ科	ナミマガシワ
イタヤガイ科	イタヤガイ、ハナイタヤ、ナデシコガイ、ニシキガイ、ニクイロナデシコ、アズマニシキ、ヒヨクガイ、ヒオウギ
イボタガキ科	イワガキ、マガキ
ウミギクガイ科	ウミギク、チリボタン
ミノガイ科	フクレユキミノガイ
サザナミガイ科	サザナミガイ
オオノガイ科	オオノガイ
キヌマトイガイ科	キヌマトイガイ
クチベニガイ科	クチベニガイ
ニオガイ科	ニオガイ、カモメガイ、イシゴロモ
ロウバイガイ科	ゲンロクソデガイ
トマヤガイ科	トマヤガイ、フミガイ
フネガイ科	コベルトフネガイ、エガイ、カリガネエガイ、ハナエガイ、ハイガイ、ハゴロモガイ、アカガイ、サトウガイ、サルボウガイ
タマキガイ科	ベンケイガイ、タマキガイ、ミタマキガイ、ベニグリガイ
マルスダレガイ科	アサリ、ウチムラサキ(オオアサリ)、オキシジミ、コタマガイ、オニアサリ、メオニアサリ、ヒナガイ、ヤマトシジミ、マシジミ、イヨスダレ、ヒメカノコアサリ、ハナガイ、ハマグリ、チョウセンハマグリ、イナミガイ、マツカゼガイ、マツヤマワスレ、シマワスレガイ、ワスレガイ
イワホリガイ科	シオツガイ、チヂミイワホリガイ
キヌタアゲマキ科	キヌタアゲマキ
ザルガイ科	チゴトリガイ、エゾイシカゲガイ
シオサザナミガイ科	フジナミガイ、イソシジミ
ツキガイ科	ヤワラカブラツキガイ
ニッコウガイ科	アラスジサラガイ、サビシラトリ、ヒメシラトリ、サギガイ、ゴイサギ、シラトリモドキ、モモノハナガイ、オオモモノハナガイ
バカガイ科	ウバガイ(ホッキガイ)、バカガイ、ヒメバカガイ、チゴバカガイ、シオフキ、チヨノハナガイ
フジノハナガイ科	フジノハナガイ a
フタバシラガイ科	ヤエウメ
マテガイ科	オオマテガイ
モシオガイ科	モシオガイ
ユキノアシタガイ科	ミゾガイ
オキナガイ科	ソトオリガイ
ツノガイ科	ツノガイ、ヤカドツノガイ
ヨメガカサ科	ヨメガカサ、ベッコウガサ

ユキノカサガイ科	ユキノカサ、カモガイ、コガモガイ、ウノアシ
スカシガイ科	スカシガイ、ヒラスカシガイ、シロスソカケガイ、クズヤガイ、オオツカテンガイガイ、オトメガサ
リュウテンサザエ科	クボガイ、ヘソアキクボガイ、クマノコガイ、コシダカガンガラ、バテイラ、サザエ、コシダカサザエ、ハリサザエ、ヒラサザエ、サンショウスガイ、スガイ
ニシキウズ科	キサゴ、ハナキサゴ、ダンベイキサゴ、イシダタミ、クビレクロツケガイ、チグサガイ、ハナチグサガイ、カイドウチグサ、アシヤガマ、エビスガイ
ミミガイ科	トコブシ
タニシ科	オオタニシ、マルタニシ
ヤマタニシ科	ヤマタニシ
リンゴガイ科	スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)
オノツノガイ科	カニモリガイ
カリバカサガイ科	アワフネガイ、ヒラフネガイ
タカラガイ科	メダカラガイ、カモンダカラ、オミナエシダカラ、ハツユキダカラ、チャイロキヌタ
タモトガイ科	タモトガイ
バイ科	バイ (バイガイ)
エゾバイ科	ミクリガイ、ヒメエゾボラ、シワホラダマシ、ゴマフホラダマシ、イソニナ、ミガキボラ
テングニシ科	テングニシ
アケキガイ科	チヂミボラ、アカニシ、エゾチヂミボラ、エゾヨウラク、オオヨウラク、ヒメヨウラク、レイシ、シロレイシ、クリフレイシ、イボニシ
トウカムリ科	レンジャクガイ、カズラガイ
クダマキガイ科	クダマキガイ、オハグロシャジク、リンドウクダマキ、ミガキモミジボラ、
セコバイ科	セコバイ
フトコロガイ科	フトコロガイ、マツムシガイ、コウダカマツムシ、ムギガイ、ボサツガイ、ムシエビ
イトマキボラ科	ヒメイトマキボラ、ナガニシ
フデガイ科	ヤタテガイ
ムシロガイ科	ムシロガイ、クロスジムシロガイ、ヒメムシロ、アラムシロ、ヨフバイ
マクラガイ科	マクラガイ、ホタルガイ、ムシボタル
タケノコガイ科	アワジタケ、イボヒメトクサ、シラネタケ、シチクガイ、コゲチャタケ
コロモガイ科	トカシオリイレボラ
フトコロガイ科	マルテンスマツムシ
ムカデガイ科	オオヘビガイ
イモガイ科	イボシマイモ、ベニイモガイ
スズメガイ科	カワチドリガイ
タマキビガイ科	タマキビ、アラレタマキビ
フジツガイ科	ククリボラ、ヒメミツカドボラ、ポウシュウボラ、カコボラ (ミノボラ)
カワザンショウガイ科	カワザンショウガイ、クリイロカワザンショウ
スズメガイ科	スズメガイ、キクスズメ
カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ
タマガイ科	ツメタガイ、ヒメツメタ、ホソヤツメタ、ウチヤマタマツバキ、フロガイダマシ

シラタマガイ科	ザクロガイ
ウミウサギ科	ツグチガイ
ビワガイ科	ビワガイ
ゴマフニナ科	ゴマフニナ
ミミズガイ科	ミミズガイ
ヤツシロガイ科	ヤツシロガイ
アサガオガイ科	アサガオガイ、ルリガイ、ヒメルリガイ
ミツクリキリホレガイ科	ホソアラレキリホレ、イワカワアラレキリホレ
イトカケガイ科	クリンイトカケ、ウネナシイトカケ、ネジガイ
ハナゴウナ科	セトモノガイ
トウガタガイ科	クチキレガイ、チャイロクチキレ、ヒメゴウナ
ウミニナ科	ウミニナ、ホソウミニナ、イボウミニナ
カワニナ科	カワニナ
イトマキボラ科	ツノマタナガニシ
ハナヅトガイ科	ハナヅトガイ
ヒラマキガイ科	インドヒラマキガイ
キセルガイ科	キセルガイ
ナンバンマイマイ科	ヒダリマキマイマイ、ウスカワマイマイ
サカマキガイ科	サカマキガイ
オカミミガイ科	スジハマシイノミガイ
カラマツガイ科	コウダカカラマツ、キクノハナガイ、カラマツガイ
カメノコフシエラガイ科	ホオズキフシエラガイ
アマオブネガイ科	イシマキガイ
イロウミウシ科	アオミノウミウシ
マダコ科	マダコ、イイダコ
コウイカ科	コウイカ

外肛動物門

トサカコケムシ科	トサカコケムシ
----------	---------

腕足動物門

ラクエウス科	タテスジホウズキガイ
--------	------------

棘皮動物門

オオバフンウニ科	アカウニ
ナガウニ科	ナガウニ
サンショウウニ科	コシダカウニ
ヒラタブンブク科	オカメブンブク
タコノマクラ科	タコノマクラ
ヨウミヤクカシパン科	ナミベハスノハカシパン
ヒトデ科	ヒトデ
スナヒトデ科	スナヒトデ
キボウシ科	アカヒトデ
イトマキヒトデ科	イトマキヒトデ、スノメイトマキヒトデ
スクレロダクティラ科	ムラサキグミモドキ

一宮町生物リスト (第一次リスト) は、令和7年3月までに、一宮町で記録された生物のリストです。植物・菌類は藤野幸恵氏、谷城勝弘氏、藻類・動物は秋山章男氏、君島憲治氏、桑原和之氏の記録をもとに、尾崎煙雄氏より提供いただいた千葉県立中央博物館の標本リストを加えて、吉田正人氏がまとめたものです。生物文化多様性計画の生物リストですので、外来種や植栽された植物も含まれています。また、かつて一宮町で標本が採取されたものの、現在はみられなくなっている種や、渡りの途中で一度だけ記録された種、海岸に打ち上げられた種も含まれています。今後、一宮町史編さんの調査を通じて充実してまいります。もし、ここにはない生物を見つけた場合にはご連絡下さい。

資料 2. 一宮町の指定文化財一覧(2025. 3 現在)

	No.	文化財名	指定年月日	種別	所有者
国指定	1	梅樹双雀鏡	昭和 28 年 11 月 14 日	有形文化財(工芸品)	玉前神社
国登録	1	芥川荘	平成 13 年 4 月 25 日	有形文化財 (建造物)	一宮館
	2	高原家住宅店蔵	平成 29 年 6 月 28 日		個人
	3	旧秋場家住宅主屋	平成 29 年 6 月 28 日		個人
	4	旧秋場家住宅土蔵	平成 29 年 6 月 28 日		個人
	5	旧秋場家住宅長屋門	平成 29 年 6 月 28 日		個人
	6	旧斎藤家住宅主屋	平成 29 年 6 月 28 日		個人
	7	旧斎藤家住宅店蔵	平成 29 年 6 月 28 日		個人
	8	旧斎藤家住宅土蔵	平成 29 年 6 月 28 日		個人
	9	旧斎藤家住宅稲荷社	平成 29 年 6 月 28 日		個人
県指定	1	木造軍荼利明王立像	昭和 33 年 4 月 23 日	有形文化財 (彫刻)	東浪見寺
	2	木造十一面観音菩薩立像	平成 15 年 3 月 28 日		観明寺
	3	玉前神社社殿附棟札	平成 8 年 3 月 22 日	有形文化財 (建造物)	玉前神社
	4	玉前神社神楽	昭和 33 年 4 月 23 日	無形民俗文化財	上総神楽保存会
	5	東浪見甚句	昭和 40 年 4 月 27 日		東浪見甚句保存会
	6	上総十二社祭り	平成 15 年 3 月 28 日		上総十二社祭り保存会
	7	軍荼利山植物群落	昭和 32 年 1 月 17 日	天然記念物	東浪見寺
町指定	1	上総とんび	昭和 50 年 4 月 28 日	無形民俗文化財	個人
	2	船頭給獅子舞	昭和 50 年 4 月 28 日		船頭給青年団
	3	地曳網漁	平成 24 年 3 月 30 日		地曳網保存会
	4	諏訪神社の紙細工	昭和 56 年 6 月 17 日	有形民俗文化財	諏訪神社
	5	加納久宜公の墓	昭和 50 年 4 月 28 日	記念物史跡	一宮町
	6	洞庭湖記念碑	昭和 56 年 6 月 17 日		一宮町
	7	延宝の津波供養塔	昭和 56 年 6 月 17 日		新熊区
	8	貝殻塚貝塚	昭和 53 年 3 月 21 日		個人
	9	高藤山城址と古蹟の碑	昭和 53 年 3 月 21 日		個人、一宮町
	10	一宮藩台場跡	昭和 53 年 3 月 21 日		一宮町
	11	芭蕉句碑	平成 4 年 1 月 14 日		玉前神社
	12	加納公紀徳の碑	平成 2 年 9 月 11 日		一宮町
	13	一宮城址	昭和 62 年 3 月 25 日		個人、一宮町
	14	水神社の大公孫樹	昭和 52 年 10 月 28 日		天然記念物
	15	イヌマキの群生	昭和 62 年 7 月 14 日	玉前神社	
	16	遍照寺のイヌマキ	平成 30 年 11 月 12 日	遍照寺	
	17	正木時通制札	昭和 52 年 10 月 28 日	有形文化財	観明寺

18	里見義頼寄進状	昭和 52 年 10 月 28 日	(古文書)	玉前神社
19	豊臣秀吉禁制	昭和 52 年 10 月 28 日		観明寺
20	船頭給村宗門人別書上控帳	昭和 63 年 12 月 23 日		個人
21	岩沼高浜方塩浜置場帳写	昭和 63 年 12 月 23 日		個人
22	地曳網豊漁安全祈願御名前帳	昭和 61 年 12 月 12 日		南宮神社
23	玉前神社社家日記	令和 5 年 5 月 17 日		一宮町
24	松喰鶴鏡	昭和 52 年 10 月 28 日	有形文化財 (工芸品)	玉前神社
25	蓬莱鏡	昭和 52 年 10 月 28 日		玉前神社
26	萌黄緘胴丸	昭和 56 年 6 月 17 日		玉前神社
27	北沢楽天の絵馬	平成 15 年 2 月 10 日		南宮神社
28	観明寺四脚門	昭和 52 年 10 月 28 日	有形文化財 (建造物)	観明寺
29	観明寺水屋	昭和 62 年 7 月 14 日		観明寺
30	観明寺金毘羅堂	平成 19 年 12 月 11 日		観明寺
31	東浪見寺本堂	平成 19 年 12 月 11 日		東浪見寺
32	万国地球輿地図	昭和 59 年 9 月 21 日	有形文化財 (絵画)	個人
33	釈迦涅槃図	昭和 60 年 2 月 15 日		観明寺
34	船頭給村土地利用図	昭和 62 年 3 月 25 日		個人
35	紙本着色俵薬師縁起絵	平成 8 年 4 月 10 日		東福寺
36	銅造阿弥陀如来立像	昭和 58 年 11 月 30 日	有形文化財 (彫刻)	善光寺
37	銅造地藏菩薩坐像	昭和 59 年 9 月 21 日		観明寺
38	観明寺地獄極楽欄間	昭和 59 年 9 月 21 日		観明寺
39	田中家の仏壇	昭和 59 年 9 月 21 日		個人
40	石造庚申塔	昭和 60 年 2 月 15 日		観明寺
41	欄間彫刻・置物	昭和 60 年 3 月 29 日		個人
42	木造十一面観音立像	平成 16 年 2 月 10 日		観明寺
43	木造不動明王坐像	平成 16 年 2 月 10 日		観明寺
44	東漸寺本堂欄間 波に龍と羅漢図	令和 5 年 5 月 17 日		東漸寺
45	一宮城出土遺物	平成 17 年 2 月 8 日	有形文化財 (考古資料)	一宮町
46	待山遺跡出土遺物	令和元年 7 月 17 日		一宮町

資料 3. 生物多様性に関するアンケート

日時：2024年11月6日～11月18日

対象：一宮町内の小学生（一宮小学校および東浪見小学校の4～6年）

方法：Google Formを使ったアンケート

結果：

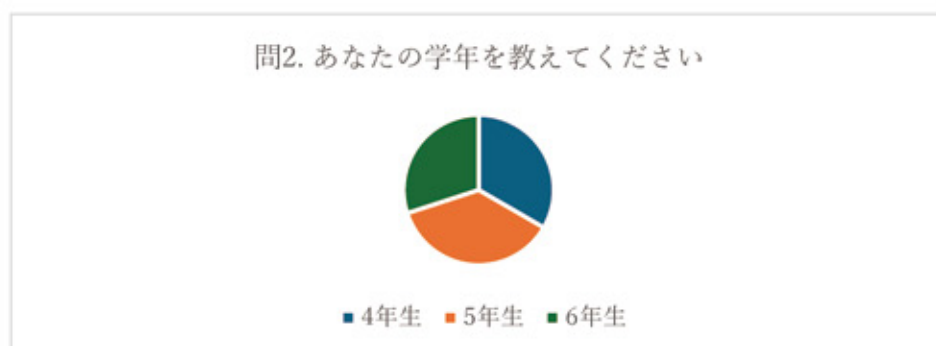
問1, あなたの通っている小学校の名前を教えてください

一宮小学校 45名、東浪見小学校 15名、合計 60名



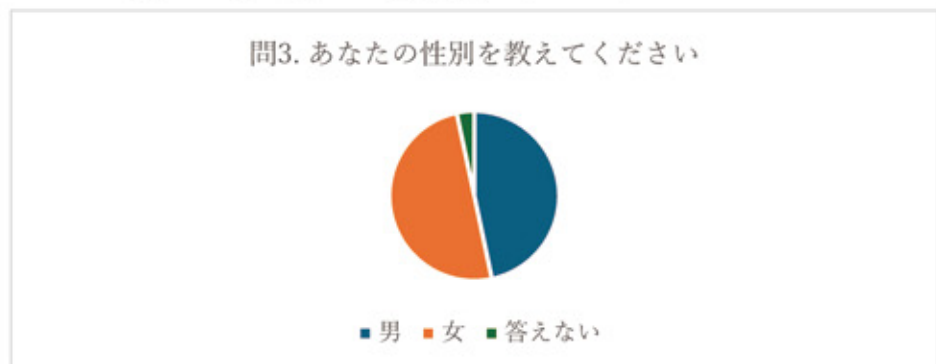
問2, あなたの学年を教えてください

4年生 20名、5年生 22名、6年生 18名

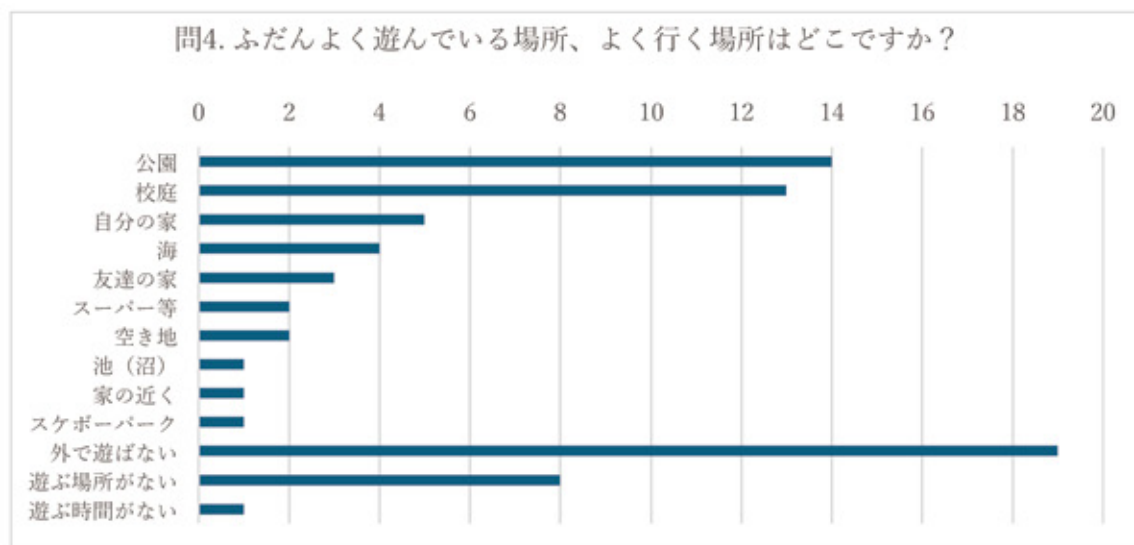


問3, あなたの性別を教えてください

男子 28名、女子 30名、回答しない 2名



問4. ふだんよく遊んでいる場所、よく行く場所はどこですか？

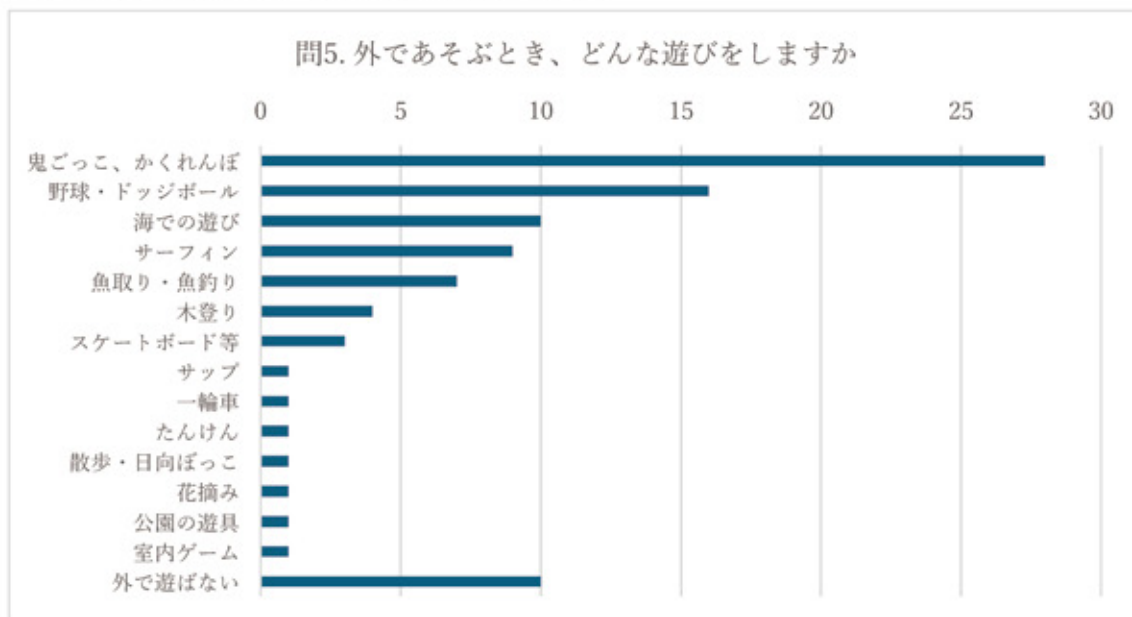


・「外で遊ばない」という回答が最も多かった。一宮小学校では 28.9%、東浪見小学校では 40%、全体では 31.7%が「外で遊ばない」と回答した。

・「外で遊ばない」と回答したのは女子が男子より多く、女子が 36.7%、男子は 28.6%であった。学年別にみると、「外で遊ばない」と回答したのは、4年生が 40.0%、5年生が 31.8%、6年生が 22.2%であった。

・よく遊んでいる場所としては、公園、校庭が最も多かった。一宮小学校では、14名(31.1%)が公園を挙げたのに対して、東浪見小学校では公園を挙げた児童は一人もいなかった。公園、校庭以外では、自分の家、友達の家、スーパー等という回答もあった。

問5, 外であそぶとき、どんな遊びをしますか？

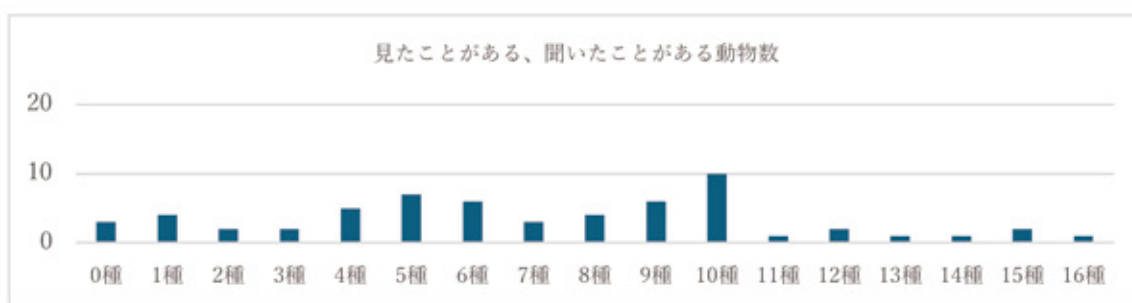
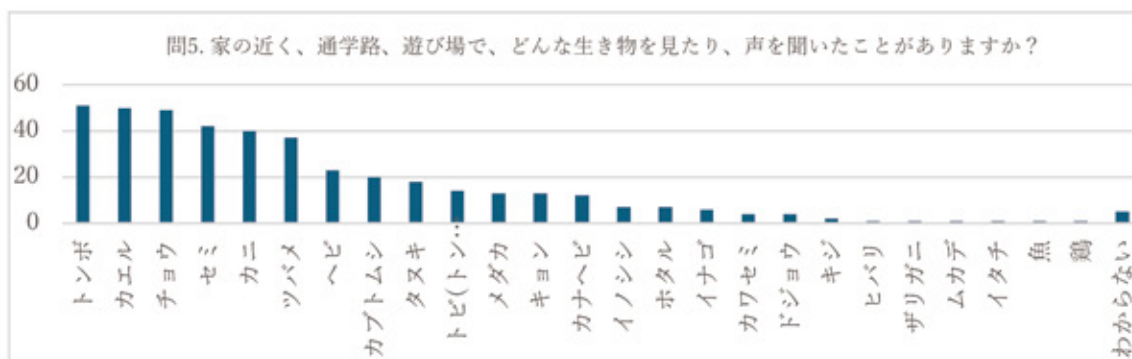


・最も多かったのは、鬼ごっこ・かくれんぼなどのゲームであった。ついで、野球・ドッジボールなどの球技であった。鬼ごっこ・かくれんぼは、女子が多く(女子56.7%、男子35.7%)、野球・ドッジボールは男子が多かった(男子46.4%、女子6.7%)。

・海でのあそび、サーフィンをこれに次いでおり、男子が女子よりも多い傾向があるものの、女子も海での遊び、サーフィンを挙げていた(海での遊び：男子7名(25.0%)、女子3名(10.0%)、サーフィン：男子7名(25.0%)、女子3名(10.0%))

・木登りは4名(すべて女子)、花摘みは1名(男子)であった。虫とり、川あそびは、選択肢にあったにもかかわらず、選択した児童はなかった。選択肢にはなかったが、スケートボード・ブレイブボード、サップ、一輪車、たんけん、散歩・日向ぼっこ、公園の遊具、室内ゲームなども挙げられた。

問6. 家の近くや通学路、遊び場で、どんな生き物を見たり、声を聞いたことがありますか？

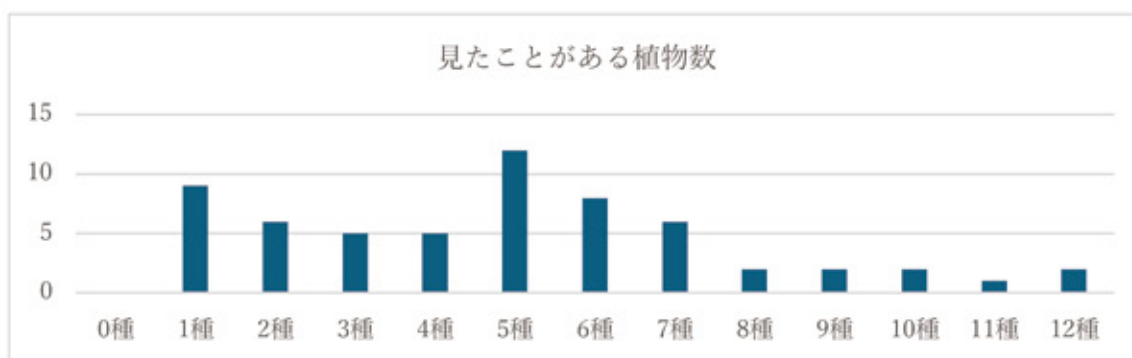
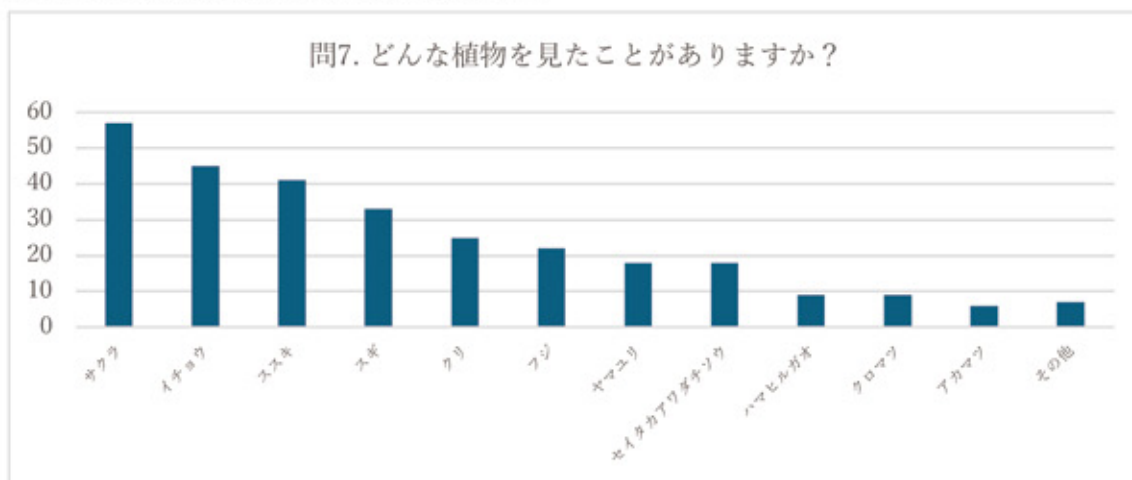


・半数の30人以上が挙げた生物は、トンボ、カエル、チョウ、セミ、カニ、ツバメであった。カワセミ、キジ、ヒバリなどの鳥類を挙げた回答者もいたが、フクロウを挙げた人は一人もいなかった。

・回答した種数は、最小0種(3名)、最大16種(1名)、平均7種(4年生7.5種、5年生7.3種、6年生6.2種、女子7.3種、男子6.6種)であった。

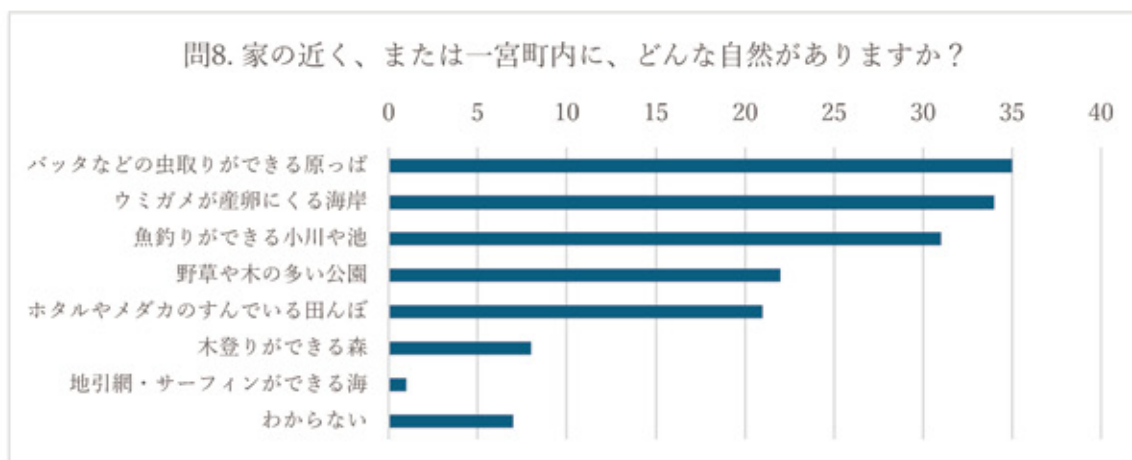
・棒グラフを見ると、0~3種、4~7種、8~10種に3つの山があり、あまりよく知らない児童、平均的な児童、よく知っている児童に3極化しているようであった。

問7. どんな植物を見たことがありますか？



- ・半数の30名以上が挙げた植物は、サクラ、イチョウ、ススキ、スギで、クリ、フジ、ヤマユリがそれに次いでいた。セイタカアワダチソウなどの外来種を挙げた児童もいた。
- ・回答した種数は、最小1種（9名）、最大12種（2名）で、平均は4.9種であった。4年生は5.4種、5年生は5.5種、6年生は3.7種、女子は5.6種、男子は4.3種であった。
- ・棒グラフを見ると、1～4種、5～7種、8種以上に3極化しているようであった。

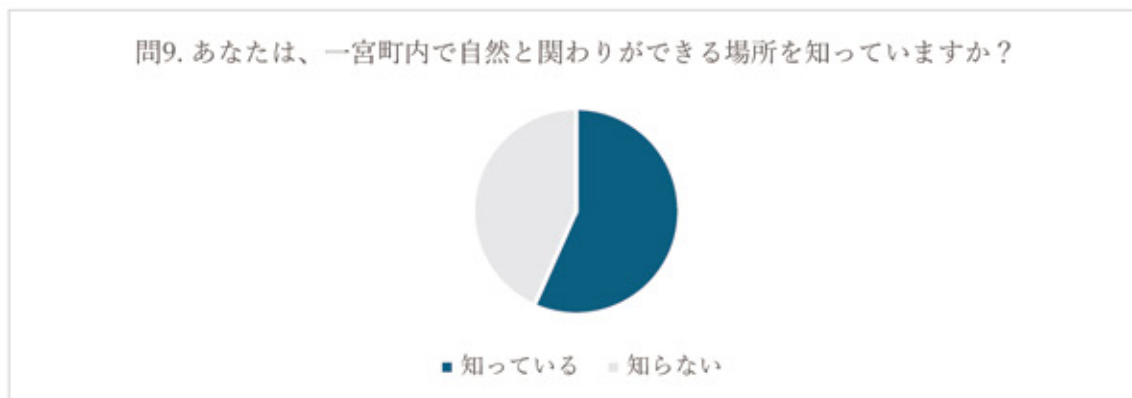
問8. 家の近く、または一宮町内にどんな自然がありますか？



・「バッタなどの虫取りができる原っぱ」、「ウミガメが産卵にくる海岸」、「魚釣りができる小川や池」が上位3位を占め、「野草や木の多い公園」、「ホタルやメダカのすんでいる田んぼ」、「木登りができる森」がそれに次いでいた。「地引網・サーフィンができる海」を上げる児童もいた。

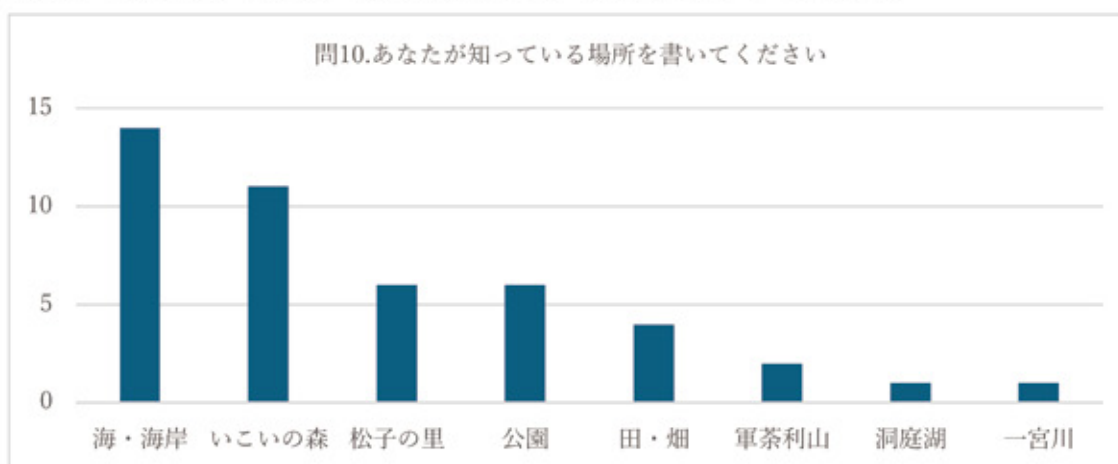
・「バッタなどの虫取りができる原っぱ」、「ウミガメが産卵にくる海岸」は男女差がなかったが、「魚釣りができる小川や池」(男子 60.7%、女子 43.3%)は男子が多く、「野草や木の多い公園」(女子 43.3%、男子 32.1%)、「ホタルやメダカのすんでいる田んぼ」(女子 40.0%、男子 32.1%)は女子が多かった。

問9. あなたは、一宮町内で自然と関わりができる場所を知っていますか？



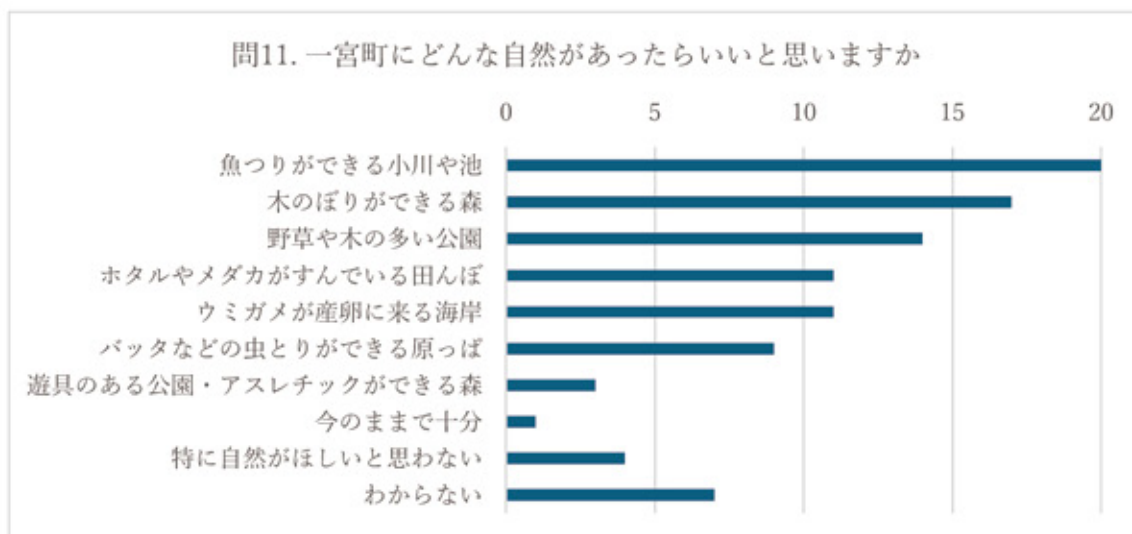
・一宮町内で、自然と関わりができる場所を知っていますかという質問に対して、「知っている」と回答したのは34名（56.7%）であった。一宮小学校では62.2%、東浪見小学校では40.0%であった。学年別にみると、4年生は42.9%、5年生は72.7%、6年生は50.0%であった。女子は60.0%、男子は57.1%であった。

問10. （知っている人に）あなたが知っている場所を書いてください。



・問9で「知っている」と書いた人に、知っている場所を書いてもらったところ、「海・海岸」、「いこいの森」、「松子の里」、「公園」、「田・畑」の順番となった。かつての一宮町の名所であった「軍荼利山」、「洞庭湖」、「一宮川」は児童にはあまり知られていなかった。

問 11. 家の近く、または一宮町内にどんな自然があったらいいと思いますか？

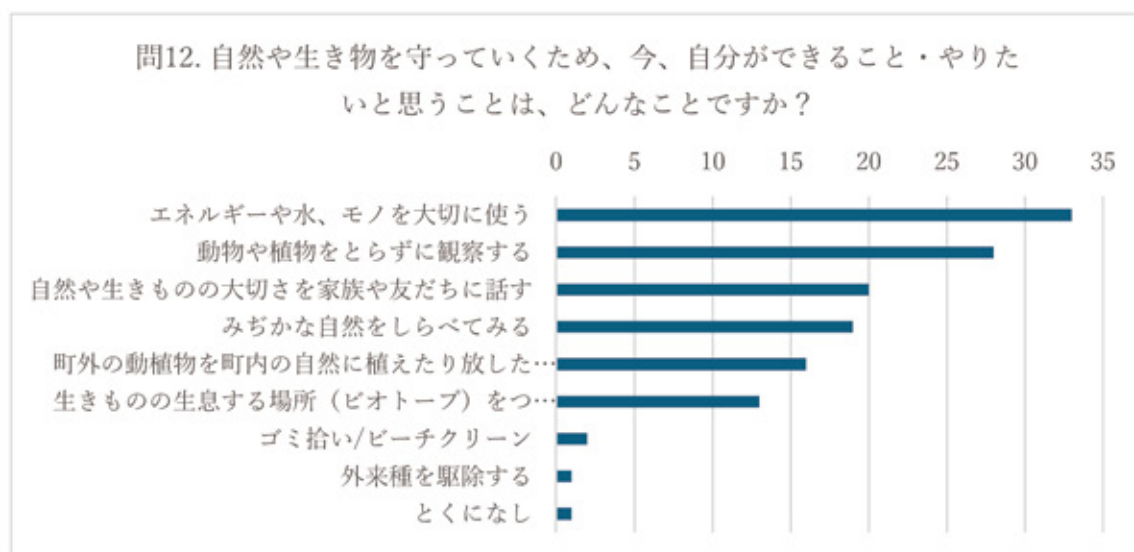


・問 8 で、現在の一宮町にどんな自然があるかを聞いたのに対して、問 11 では、将来の一宮町にどんな自然があったらいいかを聞いた。

・「魚釣りができる小川や池」、「木登りができる森」、「野草や木の多い公園」、「ホタルやメダカがすんでいる田んぼ」、「ウミガメが産卵に来る海岸」、「バッタなどの虫取りができる原っぱ」、「遊具のある公園・アスレチックができる森」の順番となった。「今のままで十分」(1名,1.7%)、「とくに自然がほしいと思わない」(4名,6.7%)という意見、「わからない」(7名,11.6%)という回答も全体の2割ほどあった。

・「木登りができる森」(男子 35.7%、女子 20.0%)と「バッタなどの虫取りができる原っぱ」(男子 25.0%、女子 6.7%)は男子が多く、「野草や木の多い公園」(女子 26.7%、男子 17.9%)は女子が多かった。

問12. 自然や生き物を守っていくため、今、自分ができること・やりたいと思うことは、どんなことですか？

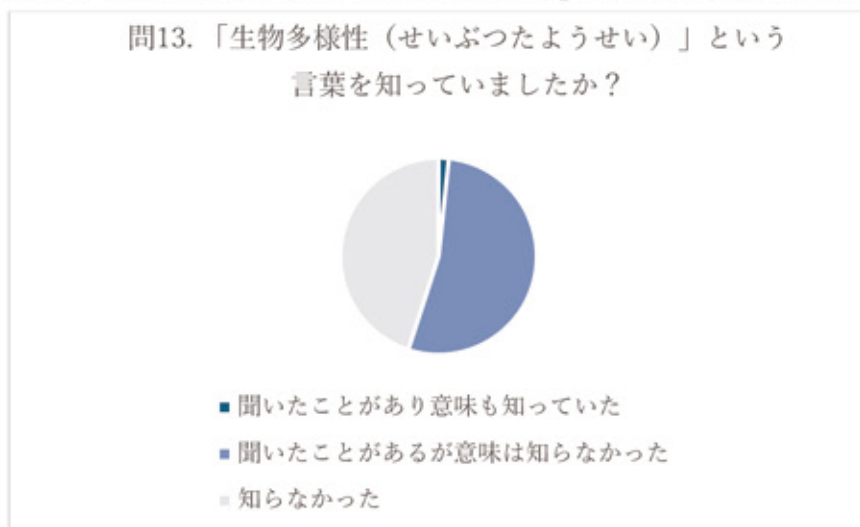


・「自然や生き物を守るために、今、自分ができること・やりたいことは何ですか？」という質問に対して、最も多かったのは「エネルギーや水、モノを大切に使う」であり、続いて「動物や植物をとらずに観察する」、「自然や生き物の大切さを家族や友達に話す」、「みじかな自然を調べてみる」、「町外の動植物を町内の自然に植えたり放したりしない」、「生き物の生息する場所（ビオトープ）を作る」の順であった。

・「自然や生き物の大切さを家族や友達に話す」は男子 46.4%、女子 23.3%、「みじかな自然を調べてみる」は女子 36.7%、男子 28.6%と若干の男女差がみられた。

・自由記述欄には、「外来種を駆除する」、「生き物がいる場所のゴミ拾い」、「みんなに松子を知ってもらおう」、「地引網をみんなに知ってもらい海を大切に使う」、「定期的なビーチクリーン」という意見も書かれていた。

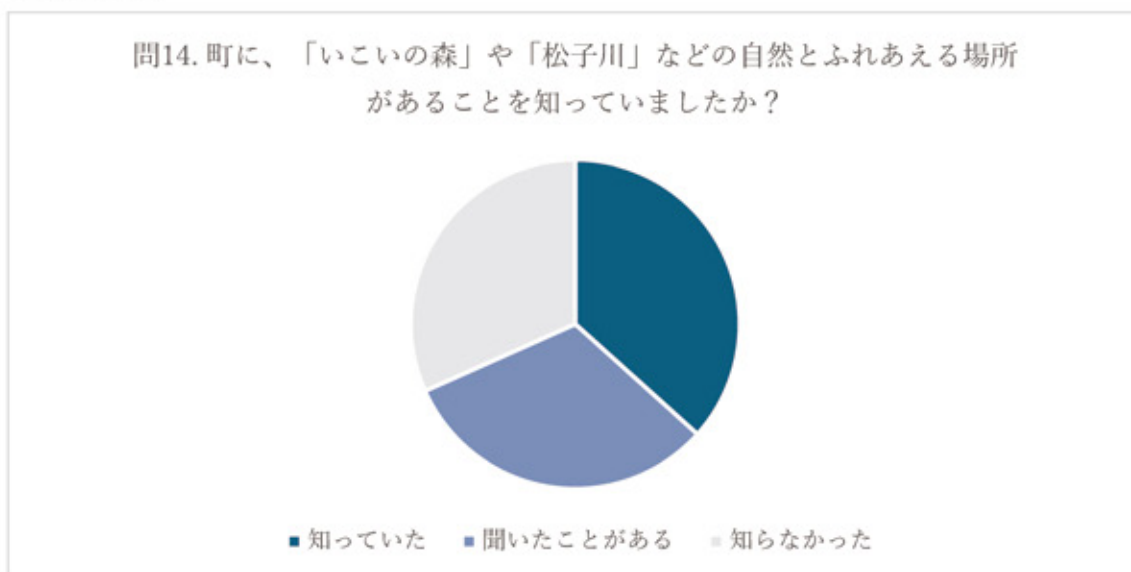
問 13. 「生物多様性（せいぶつたようせい）」という言葉を知っていましたか？



・「「生物多様性」という言葉を知っていましたか？」という質問に対して、「聞いたことがあり意味も知っていた」と回答したのは1人(1.7%)、「聞いたことはあるが意味は知らなかった」と回答したのは32人(53.3%)、「知らなかった」と回答したのは、27人(45.0%)であった。

・千葉県内では、生物多様性地域戦略を作成するにあたって、複数の市において、小学生を対象としたアンケートの中で、全く同じ質問がされている。今回の一宮町のアンケートでは、「聞いたことがあり意味も知っていた」という回答はわずか1名であり、「知らなかった」が45%を占めた。生物多様性の認知度が極めて低く、学校教育、社会教育の中で、認知度を高めるさらなる工夫が求められる。

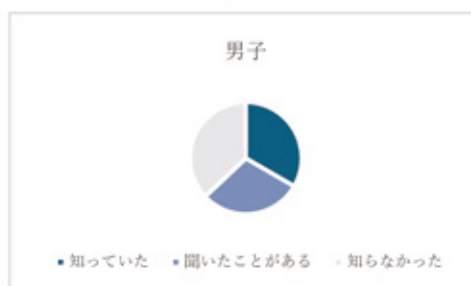
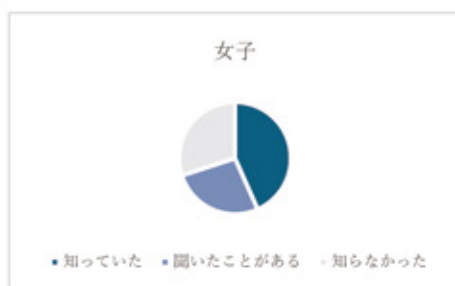
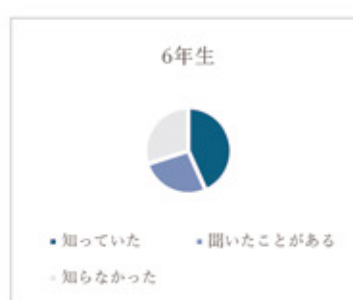
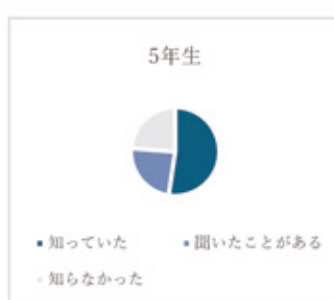
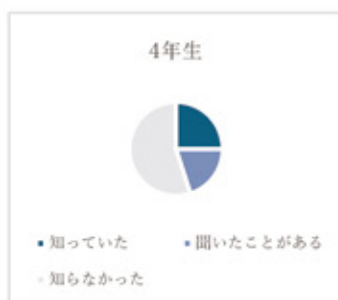
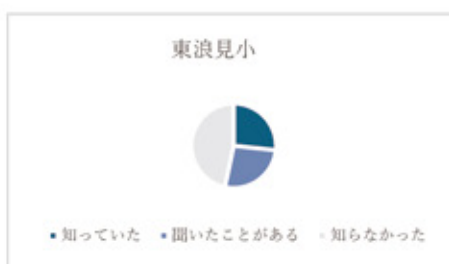
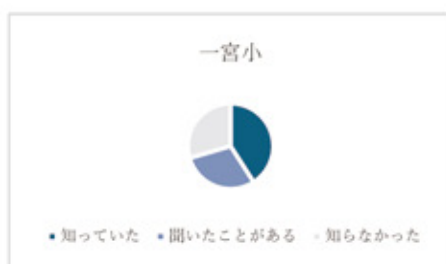
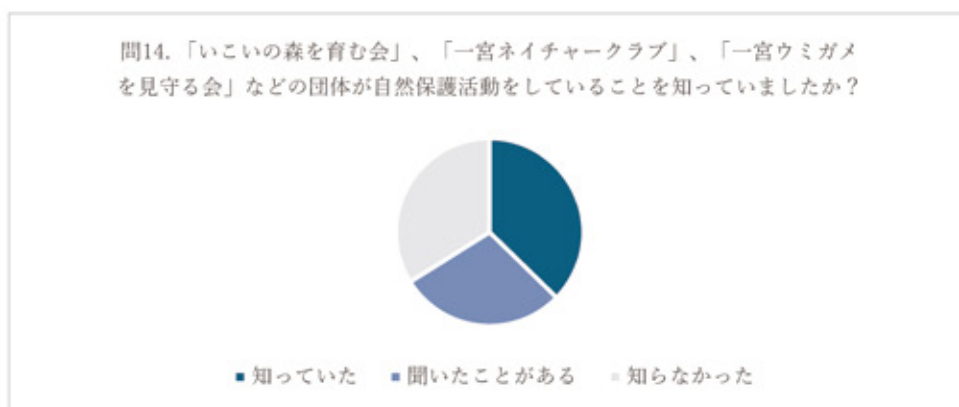
問14. 町に、「いこいの森」や「松子川」などの自然とふれあえる場所があることを知っていましたか？



・「町に、「いこいの森」や「松子川」などの自然とふれあえる場所があることを知っていましたか？」という質問に対して、「知っていた」が23人(38.3%)、「聞いたことがある」が19人(31.7%)、「知らなかった」が18人(30.0%)であった。

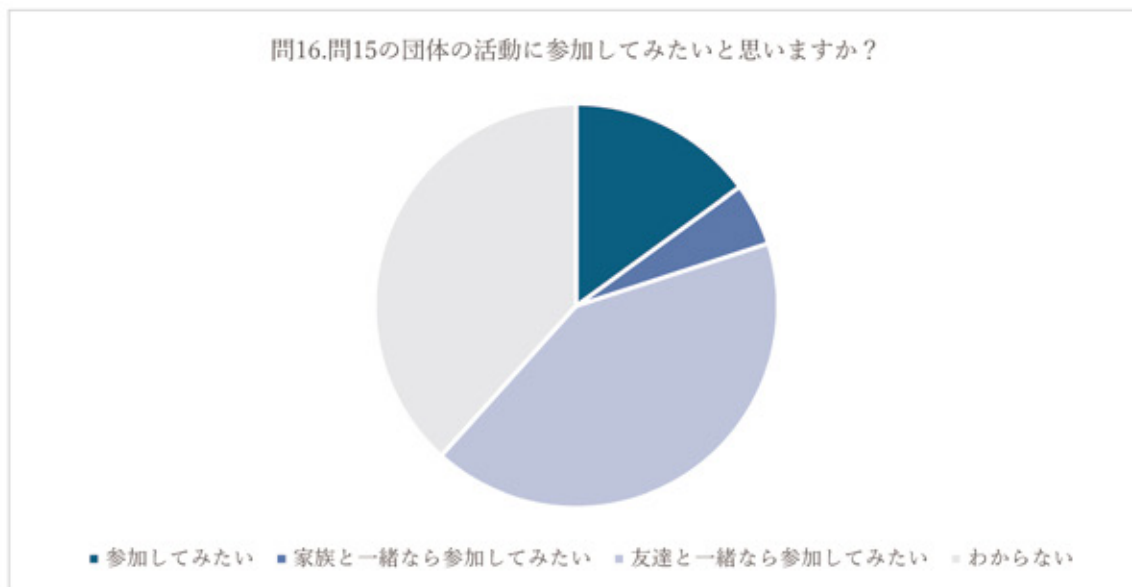
・「知っていた」と回答した女子は53.3%、「知らなかった」が23.3%に対して、男子は「知っていた」が25.0%、「知らなかった」が32.1%にのぼり男女差がみられた。

問 15. 「いこいの森を育む会」、「一宮ネイチャークラブ」、「一宮ウミガメを見守る会」などの団体が自然保護活動をしていることを知っていましたか？



・「いこいの森を育む会」、「一宮ネイチャークラブ」、「一宮ウミガメを見守る会」などの団体が自然保護活動をしていることを知っていましたか？という質問に対して、「知っていた」は22人(36.7%)、「聞いたことがある」が17人(28.3%)、「知らなかった」が21人(35.0%)であった。女子の43.3%が「知っていた」のに対して、男子は32.1%であった。4年生は25%であったが、5年生は50%、6年生は72%と「知っていた」人が増えている。

問 16. 問 15 の団体の活動に参加してみたいと思いますか？



・「問 15 の団体の活動に参加してみたいと思いますか？」との質問に対して、「参加してみたい」は 9 名 (15.0%)、「家族と一緒に参加してみたい」が 3 人 (5.0%)、「友達と一緒に参加してみたい」が 25 名 (41.7%)、「わからない」が 23 名 (38.3%) であった。全体の 62%が何らかの形で「参加してみたい」という意向を持っていた。

資料 4. 一宮町生物文化多様性計画策定委員会設置要綱

(設置)

第1条 生物文化多様性計画の策定に当たり、必要な事項を検討するため、生物文化多様性計画策定委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、委員9人以内で組織し、次の各号に掲げる者のうちから、町長が委嘱する。

- (1) 学識経験のある者 5名以内
- (2) 公募委員 2名
- (3) 町議会の議員 1名
- (4) 関係行政機関の職員 1名

2 前項第2号に規定する公募委員は、別に定める一宮町生物文化多様性計画策定委員会公募委員募集要領により募集する。

(委員長及び副委員長)

第3条 委員会に委員長及び副委員長を置く。

2 委員長及び副委員長は、委員の互選により定める。

3 委員長は、委員会を代表し議事の進行及び整理を行う。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき又は委員長が欠けたときはその職務を代理する。

(委員の任期)

第4条 委員の任期は、生物文化多様性計画策定の完了をもって満了とする。

(会議)

第5条 委員会の会議は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員会は、検討するため必要があると認めるときは、委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(事務局)

第6条 委員会の庶務は、都市環境課において行う。

(雑則)

第7条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

この要綱は、令和6年6月1日から施行する。

資料 5

一宮町生物文化多様性計画策定委員会 委員名簿

	区 分	氏 名	役 職 等	備考
1	学識経験者	吉田 正人	筑波大学名誉教授	委員長
2	町議会の議員	川城 茂樹	一宮町議会議員 総務経済常任委員会委員長	副委員長
3	学識経験者	渡部 明美	一宮ウミガメを見守る会会長	
4	学識経験者	増田 美奈	一宮ネイチャークラブ会長	
5	学識経験者	千葉 一	いこいの森を育む会 代表	
6	学識経験者	廣瀬 玲士		
7	公募委員	大橋 珠樹		
8	公募委員	能勢 学	特定非営利活動法人 緑と海とサーフィンと子供達 代表	
9	関係行政機関の職員	江澤 一樹	一宮町教育委員会学芸員	

任期：令和6年8月1日から令和7年3月31日

一宮町生物文化多様性計画

発行日 令和7年3月

発行 一宮町都市環境課

〒299-4396 千葉県長生郡一宮町一宮2457

TEL : 0475-42-1430 FAX : 0475-40-1075

